

幼児の教育 第114巻 第3号 平成27年7月1日発行 ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

# 幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考

「自然体験」って何だ？

[シリーズ] 子どもが育つ場所から

「あそんでぼくらは人間になる」

[子ども学探訪] 昔むかしのキンダーブック

『ツバメノウチ』にみる戦前の遊戯作品

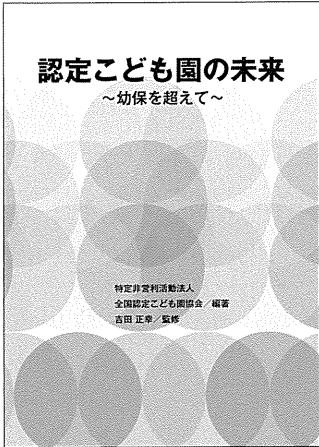
夏 2015

since 1901

第114巻 第3号 日本幼稚園協会

# この1冊で“認定こども園”がわかる!

認定こども園について、制度&実践事例をくわしく、わかりやすく紹介。



10942

## 認定こども園の未来 ~幼保を超えて~

厳選された24園の優れた事例と、わが国を代表する研究者・有識者のコメントにより“認定こども園”の未来がわかる。

特定非営利活動法人 全国認定こども園協会 / 編著  
吉田正幸 / 監修

定価 本体2,400円+税  
280ページ 21×15cm

### 特長

- ① 全国から出色の**24**園の事例を紹介
- ② 保育界を代表する**9**名の研究者・有識者が執筆  
(わかりやすい制度解説/気になる海外+OECD諸国の動向)

# 指導計画作成の基本がわかる! 実践事例が豊富な公式解説書



29401

## 幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開 (平成25年7月改訂)

幼稚園教育要領を踏まえた指導計画の作成と保育の展開、評価について、具体的な事例とともにまとめて解説。

文部科学省 / 著

定価 本体250円+税 168ページ 30×21cm

### 指導計画の基本的な理解と実践に役立つ事例を豊富に掲載

指導計画作成の基本的な考え方からはじまり、教育課程・年間指導計画・月案・週案・日案・保育中のエピソードなど豊富な事例により、指導計画の理解と作成・展開に役立つ資料です。

### 「保育の質」を高める評価・改善につながるポイントを解説

保育の評価・改善の重要性が高まる中で、指導計画の評価・改善の具体的な手順とポイントについても解説。研修で活用することで、保育の質の向上につながります。



ずぼっ

砂場で田植え

子どもの情景

写真

子どもの情景 ①

目次

自然体験とは何か ②

特集

保育現場で気になるコトバ考 6

「自然体験」って何だ？ ④

view 視野

自然が育む子どもと未来―自然とかわる  
健やかな育ちを目指して― 大澤力 ⑤

視点

日々、共にあるものとして 伊東良子 ⑪

保育者にとつての

「自然体験」の意味 室田洋子 ⑮

デンマークの

「森の幼稚園」を訪れて 中村絃子 ⑲

《特集 memo》 23

シリーズ

子どもが育つ場所から

「あそんでぼくらは人間になる」 宮本雄太 24

実践研究

私の保育ノート

甥Yとの小さな冒険 寒河江芳枝 32

育休日誌

母になるということ その2 郡司明子 36

保育エッセイ

子どもは豊かな遊びの世界を生きている ②

あこがれに向かう力 河邊貴子 40

本棚

古典の散歩道

フランスの二人のノーベル賞作家 中村俊直 44

# 目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある  
スタンドグラスの模様をデザイン化したものです。

## 子ども探訪

### 昔むかしのキンダーブック ②

『ツバメノオウチ』にみる戦前の遊戯作品

小栗巨子

50

## 論考

### 保育のクロスロード 保育は素敵な物語 (1)

十年後の手紙 湯澤美紀

56

## 子どものことば

### イベント・メディア情報・

読者投稿・編集後記 他

63

まど

## 自然体験とは何か

「自然体験」を特集した。夏であればやはり、入道雲の下でのセミ取り、海水浴、キャンプ……と自然の懐に抱かれて、子どもたちには思い切り体を動かして遊んでほしい。自然とは程遠くなくなった現代生活の中で、その願いは切実な叫びでもある。考えてみれば、人の体自体がそもそも自然の一環なのだ。なのに、人は自然を操作し尽くせると思い込み、目先の利便性のためにその汚染や破壊を繰り返してきた。今のところはまだ、その偉大なる自然が持つ、循環し「めぐる」力にどうにか助けられてはいる。でも、それもいつまでだろう。人間がその「めぐる」力をあまり軽視すると、取り返しがつかなくなるかもしれない。

自然を体験することで、人はわが身の「分」を知るのでないか。確かに人は弱く小さい存在ではあるけれど、自然というものの大きさをわきまえて付き合えば、これほど美しく、恵み深く、興味の尽きない、包容力の豊かなものはないということを実感し、親しみを感じていく。割り切れない問題に直面しても、きつとどこかに思わぬ解決の糸口があつて、いつか新しい局面が「めぐって」くるものだという樂觀性、忍耐力を、自然体験は人に植え付けてくれるのではないか。(浜口)

## 特集

保育現場で**気**になるコトバ考6

# 「自然体験」って何だ？

子どもの周囲にある《自然》。海、山、空、光、風という自然もあれば、園庭の花壇や畑、飼育物も大切な自然環境。しかし今、子どもがそんな自然を《体験》する時間は著しく減少し、代わりに、ゲーム機や携帯のシミュレーション体験にカラダが浸かっていく時代……。それって「自然」？ 今回は、《自然体験》の意味を改めて見つめます。



view  
視野

## 自然が育む子どもと未来

— 自然とかがわる健やかな育ちを目指して —

大澤力

(大学教員)

はじめに

子どもたちが自然に囲まれ楽しく遊ぶ姿に接するたびに、私は無上の幸せを実感します。子どもの健やかな育ちにかかわる仕事をさせていただいていることに、心より感謝いたしております。

こうした幸せな思いと共に、一方で、昨今の子どもたちの育ちをめぐる環境の動向をかんがえます時……次の時代、果たして本当に人類が幸せに過ごせるように世界は機能し、展開し得るのかどうか？ 幼子は時が経れば、必ず大人となり、次の時代を創造していきます。その時、目の前の子どもたちが、心の底から喜びをもつて、苦勞をもとせせず、次の時代を雄々しく創造する労作活動に本気で取り組めるかどうか？ 正直、昨今の子育てをめぐる状況からは、自信を持って大丈夫だと断言できる裏付けは見当たらないのが現実です。

また、先年「日本創成会議」の分科会が二十〜三十代の女性の減り方などから試算したと

大澤力(おおさわつとむ)  
東京家政大学子ども学部子ども支援学科教授。博士(学校教育学)。子どもの自然・環境・持続可能性教育の研究。著書:『幼児の環境教育論』(文化書房博文社)他。

ころ、平成二二年から三十年間、人口流出を食い止める手立てを講じない限り、八九六もの自治体の若い女性の数が半分に減るとされ、そうした都市は、いずれ消滅してしまう恐れが高い「消滅可能性都市」という寒々しい名称が付けられました。このことは、子どもの出生数やGNP（国民総生産）、人口減少や過疎過密といった現象ともかかわっていますが、これら消滅可能性都市は、大都会である東京二十三区や大阪市内にも存在するのです。

こうした厳しい現状を直視すればするほど、子どもの育ちにとって望ましい環境は、すなわち人類の生息にとっても望ましい環境であることを、今改めて問い直す必要性を痛感いたします。さらに平成二七年四月一日からは、新しい子育てにかかわる法制度がスタートしています。特に重要な子育ての場となる幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園などにおける身近な社会環境・自然環境を、幼児教育や保育においてより有効に活用することが、今、切実に求められているのです。本稿では、特に自然環境とのかかわりとしての「自然体験」の持つ意味やそのあり方を述べさせていただきます。

### 子どもたちにとって大切な「身近な」環境

幼児期の子どもたちが受けとめている環境には、大人たちとは違った幾つかの大きな特徴があるといわれています。その一つ目は、生活圏が狭く小さいということです。そして、成長とともに生活圏は徐々に広がりを見せていきますが、幼稚園教育要領にはこの幼児期の特徴をとらえた「身近な……」といった表現が数多く用いられています。<sup>注1</sup>



## 家庭・園・地域社会で形成される「身近な社会環境」

幼児期の子どもたちが受けとめている環境、その二つ目の特徴は、社会環境と自然環境の二つに大きく分かれることです。

家族と過ごす「家庭」は、子どもにとって生まれて初めての温かく・居心地の良い・緩やかな規制のある・小さく・身近な社会環境です。やがて子どもたちは、もう少し大きな社会環境である幼稚園や保育園、こども園といった「園」環境にかかわるようになっていきます。ここでは、家庭にいる時のようなわがままや気ままな行動は、集団生活といった枠で統制されていき、子どもたち一人ひとりが生きていくのに必要な社会性が自らの体験を通して徐々に培われていくのです。家庭や園をも包み込む「地域社会」は、日常生活における家族との散歩や買い物、園への往復や園外保育といったさまざまな場面で活用され、子どもたちの成長や発達に貢献します。

## 子どもたちの成長・発達に重要な「身近な自然環境」

社会環境と共に、自然環境の重要性は一般に知られています。「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児心の安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる<sup>注2</sup>」と幼稚園教育要領にも記されています。

日本の気候風土がもたらす豊かな四季や生活、さらに繊細で優美な感性も相まって、幼児

期の子どもたちの環境における受けとめ方の三つ目の特徴は、五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を多く活用して受けとめることが挙げられます。そして、幼児期の自然体験（自然とのかかわり）では、身近な自然環境を大きく三つの側面からとらえることができ<sup>注3</sup>ます。

(1) 動物・植物といった「いのちそのものの自然」…

日常保育におけるダンゴムシ・ウサギ・タンポポ・サツマイモなどのかかわり

(2) 地球で生きていくために必要な空気・水・土・熱・光など「いのちを支える自然」…

日常保育における砂遊び・水遊びなどに代表される自然物とのかかわり

(3) 自然現象や自然科学といった身近な環境で起こる「自然の働き」…

日常保育における季節の変化を楽しむことや科学遊びに代表される、不思議で面白い自然の現象とのかかわり

### 幼児期自然体験の目標・目的

こうした身近な自然と仲良くかかわりつつ幼児期の子どもたちは成長や発達をしていくのですが、長年幼児教育における子どもと自然のかかわりを研究・実践し、『幼児の自然教育論』を著している山内昭道（東京家政大学名誉教授）は、「自然を感じる」「自然を生活や遊びに使う」「自然について考える」といった三つの流れを自然体験で位置付けています。これらはバラバラなものではなく、つながったり合わさったりしながら、「自然を感じ」「自然を扱（使）い」「自然を考える」ことで、子どもたちの「よく感じる心」「よく動く手と体」「よく働く頭」を育み、やがて「自然を愛護する人間」を形成していくのです。<sup>注4</sup>

## 人間の一生と地球の存続に重要な「センス・オブ・ワンダー」

「もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもにも、生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー』神秘さや不思議さに目を見はる感性』を授けてほしいとたのむでしょう。」<sup>注5</sup>

これは、世界的な環境の危機に警鐘を鳴らしたレイチェル・カーソン女史の最後の著書『センス・オブ・ワンダー』にある重要な一節です。彼女が最終的に到達した、人類にとって身に付けるべきものは「感じる力」であり、それは自然体験によって得られるのです。

## センス・オブ・ワンダーと原体験 (Protoexperience)

このセンス・オブ・ワンダーでもある「感じる力」と「自然体験」を子どもたちの成長や発達に確実に位置付けたのが、山田卓三（兵庫教育大学名誉教授）です。その著書の中で、「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官（感）で知覚したもので、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験<sup>注6</sup>」といった、自然と十分にかかわる「原体験」を提唱しています。

## 身近な自然を子どもたちと一緒に創り出すビオトープの教育効果

子どもたちの生活する場に身近な自然環境を積極的に創り出し幼児教育に活用するビオトープ（あるひとかたまりの生き物の生息空間）は、大きな可能性を秘めたものです。著者は、

このビオトープに着目し、幼児教育の場で子どもたちに育まれるものを実践研究してきました<sup>注7</sup>。その結果、日常保育で子どもたちが身近な自然環境と頻繁にじつくりとかかわることによって、安心する（心の癒し）・やる気を出す（意欲の向上）・自信を持つ（自立する心）・他を思いやる（自然を大切にする）・工夫発見する（科学の芽）といった力が育まれることがわかってきました。このことは、自然とのかかわりを核にした成長や発達、人間関係や社会性なども含んだ「全人格的な成長や発達」へと進行することの証なのです。

さあ、身近な自然環境と十分にかかわる遊びを、子どもたちと共にたくさん楽しみましよう！ そこにこそ、輝かしい未来が確実にやって来るのです<sup>注8</sup>！

#### 引用・参考文献

- 1 文部科学省「幼稚園教育要領」チャイルド本社 一九九八年
- 2 1に同じ
- 3 山内昭道著『幼児の自然教育論』明治図書 一九八一年
- 4 3に同じ
- 5 レイチェル・カーソン著・上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 一九九六年
- 6 山田卓三著『生物学からみた子育て』裳華房 一九九三年
- 7 大澤力「幼児の発達を促す望ましい自然体験に関する一考察——ビオトープを中心とした教育効果の構造的把握による検討——」理科教育学研究第47巻第2号 pp.13-20
- 8 大澤力編著『自然が育む子どもと未来（心を育てる環境教育3）』フレーベル館 二〇〇九年

## 視点1

# 日々、共にあるものごと

伊東良子

(保育士)

私が勤める川和保育園は、園庭保育を中心に、「子どもたちが意欲的に遊び込める保育環境」というものを日々考えて保育しています。子どもが一日の大半を過ごす保育園の役割は、とても大きく、責任あるものと思っています。

川和保育園の園庭は、土や水に恵まれた環境にあり、園長が四十年かけて植え続けてきた木々に見守られ、風や光を浴びながら、〇歳児から五歳児までが共に過ごしています。生い茂った木々は季節ごとに見せる姿を変え、私たちの目と心を奪います。夏には大きな木

陰を作り、心地良さを教えてくれます。秋には舞い落ちる葉に手をかざし、踏みならし、焼き芋を楽しみます。すっかり葉が落ちた冬には、毎日たき火が登場し、子どもたちの心と身体を暖めてくれます。そして春の訪れ。木々の芽吹きは新年度の始まりを告げ、ワクワクさせてくれます。

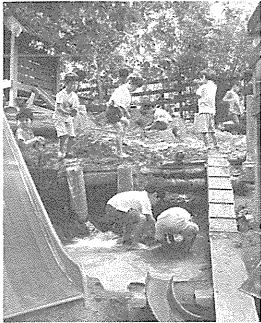
「自然体験」って何だ？ と問われた時、子どもたちの姿と共にこれら四季折々の光景が浮かび、それは『日々共にあるもの』ではないかと感じました。

伊東良子 (いとうりょうこ)  
川和保育園保育士。

## 「自分で考え 自分で遊ぶ 子どもたち」

これは私たちが大切にしていることです。幼児クラスだけでなく、乳児クラスも含むすべての子どもたちに与えられている自由です。

私たちは遊びの中で「動」と「静」というものを大切にしています。一見すると、「動」  
「園庭」、「静」  
「室内と考えられがちですが、園庭においても室内においても「動」と「静」は両立できるものです。園庭でダイナミックに身体を使って遊ぶことはもちろんですが、園庭であつても「静」の時をゆつくり持てる空間が至る所にあるのです。これは子ども自身がつくり出すものです。  
子どもは、  
どんなに小さな子であつても、自分のま



▲園庭での遊び

なざしというものを持っています。そのまなざしの先にあるもの——その中でたくさん「発見」と「不思議」に出会い、そして、その出会いがその瞬間その瞬間、さらにそれがその子どもたちの数だけあるとしたら、何という豊かな世界で私たちは生きているのだろうと思えてなりません。「発見」や「不思議」に出会った子どもたちは、自分が守られている温かい腕から自ら離れ、自ら這い、土を踏みしめ、じつと見つめ、手を伸ばし、何かを確かめていこうとします。自分の「まなざしの先へ」歩んでいこうとする背中が、どんなに小さくとも一人の人間としての存在の大きさを見たと知らしめてくれます。こんな場面を見た時に、いつも思い出す文章があります。

「多くの親は、熱心で繊細な子どもの好奇心にふれるたびに、さまざまなきものたちが住む複雑な自然界について自分がなにも知ら

ないことに気がつき、しばしば、どうしてよいかわからなくなります。そして、

『自分の子どもに自然のことを教えるなんて、どうしたらできるといふのでしょうか。わたしは、そこにいる鳥の名前すら知らないのに！』と嘆きの声をあげるのです。

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、隣れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびよびさまされると、次はその

の対象となるものについてもつとよく知りたいたいと思うようになります。そのようにして見つけだした知識は、しつかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。』（レイチエル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』新潮社一九九六年）

このレイチエル・カーソンの言葉は、子どもの本質的欲求とされる学びの場が「特別なもの」としてではなく、「常に共にあるもの」としてどれだけ重要であるかということ、私たちに教えてくれています。

## 園外保育

私たちはよく園外保育にも出かけます。幼児クラスは週に一回くらい、園バスで二十分



▲夏の三ツ峠。下山より雨の三ツ峠に

ほどの「三保市民の森」や「こどもの国」へ行きます。初夏から夏の終わりにかけては三浦半島にある「三戸浜」へ海遊びに行きます。ライフジャケットを着て沖まで泳いだり、波乗り、カヌー、岩からの飛び込みをしたり、網を持って磯遊びや、貝拾いをしたり……。海は、穏やかな澄んだ顔の日もあれば、波の高い荒々しい顔の時もあります。子どもたちは大きな自然を前に、じっとその姿を見つめます。そんな時の子どもたちは、筆舌にし難い、厳しくも素晴らしい表情をします。

年長になると、一八五〇メートルの「三ツ峠」に、初夏、秋、雪の季節に登ります。一見「動」のような活動ですが、「静」だと私は思っています。子どもた

ちは、到底かなうことのできない大きな自然の中で、五感を研ぎ澄ませ、日々遊び込むことで作られてきた身体を使いこなし、山の厳しさと、だからこそ感じられる自然の大きな力、本当の優しさを感じていくのだと思います。

「自律」というものは、きちんと自分の目で物事を見られるようにならなければ身に付かないものだと思います。教えるのではなく、それ以前に、子どもが、自身の欲求する経験を十分に行える環境にあること。それには自然は不可欠で、自然と対峙することで、「自分が持つべき距離」も育っていくのだろうと思います。この体験がやがて、何かに思いを寄せる、人間らしい心動く姿になっていくと信じています。



▲夏の三ツ峠で



## 視点2

# 保育者にとっての「自然体験」の意味

室田洋子

(大学教員)

### 保育の感性 (sensitivity) を開く

保育者が「ほんとうに」驚き、発見し、感動すること。本物を体験し、子どものように夢中になり、びっくりし、探索し、知りたいと思う経験をする。それは日常の保育活動に強い刺激を与えるものと考えます。保育者自身が本物の自然体験をすることの意味はここにあります。子どものように心を躍らせる経験を、机上の知識ではない、日常の経験を超えた体験があふれるほどにある場が自然体験の真髄です。

### ホントの体験

保育の場で食育を行うと、子どもたちは、「ままごことではない、ホントの体験」に生きると反応します。クッキングの保育、園庭の野菜作り、自分で選択できるバイキングの食事、散歩途中に見つける「食べられる、役に立つ」植物探しの時に見せる姿です。生き生きとした「一人前の」「役に立つ自分」(self-esteem efficacy)を示す姿です。子どもたちの誇らかな自尊心の源となる体験です。子どもたちの好奇心や興味は日常の気付き

室田洋子 (むろたようこ)  
聖徳大学児童学部児童学科前教授。聖徳大学児童学部児童学科・聖徳大学大学院児童学研究科・聖徳大学大学院人間栄養学研究科兼任講師。

や自然体験の中に多く存在します。この気付き (sensitivity) や好奇心に波長を合わせ、問いに答えることができるか、これは保育の場で問われる重要な力量です。保育者本人の生の感動体験が重要であると考える理由です (残念ながら現在の幼稚園教諭・保育士養成の課程にはこれらのカリキュラムはありません)。知識や情報ではなく、生の体験です。

八ヶ岳山麓二七〇ヘクタールの森と牧場と農場の地で平成二六年夏より開始した保育者のための自然体験合宿は、このような意図によるものです (ここでいう保育者とは、幼稚園教諭・保育士・栄養士・看護師・協力者など、乳幼児にかかわる仕事をするすべての人を指します)。

### 実際の様子をのぞいてみましょう

長靴を履いて出る広い農場の中、もぎ取ったトマトをその場でかじる。この新鮮な味は

食べてみないとわからない。

わき出る泉、幅五十センチほどの小川が始まっていく。両側にはクレソンの群生。「クレソンよ」「コンフリーよ」「食べられるのよ」と言われなければ気付かない都会育ちの現実。鶏の卵集め。堆積し、ぬかるむ糞ふんを踏みしめる慎重さ。卵はこんなにも温かいものなのか。落とさないように気をつけて、足の周りに寄ってくる鶏たちに卵の礼をつぶやく。

牛舎は清潔。子牛の眼の何と愛くるしいところか。人を見ると鼻を寄せてくる。母牛の張り詰めた乳房は頼もしい。手を添えて搾るバケツに勢いよく乳が集まる。

畑の雑草取りには誰もが夢中になる。もう少し、もう一握りの雑草を取りたい。荒地地の雑草とは違い、耕された良い土地の雑草は、人にも「退治する楽しさ」を与える。雑草と呼んでは申し訳ない。スベリヒユ、高血圧の人に役立つ大事な葉草だそう。葉は広がっ

ているが抜きやすい。雑草にもそれぞれ名前がある。用途もある。

ハーブの畑に歩いて移れば、何十種類もの本物の「役に立つ雑草」が繁茂している。藍の葉で子どもたちと藍染め遊びをしようか。ミントの群生は美しい。切り取ったルバーブの茎をかじる。酸っぱい。これがジャム作りには欠かせない要素。小さな包丁を使える四歳児のクッキングにはちょうどよい。後で、採れ立て販売所でルバーブの束を購入しよう。機会を外せば来期までは手に入らないもの。販売所の横の斜面にはリンゴの木に実がなっている。完熟したリンゴは草の上に自分で降りる。店で買うリンゴとは大違い。パキッと割れて新鮮そのもの。

畑でニンジンを抜く。ダイコンも抜く。ジャガイモを掘る。どの作業も人を夢中にする。ものすごくおいしそうなニンジンの葉。太いニンジン、ダイコン。土を払ってその場をか

じりたい。時々足を組んだ格好をしたニンジンにも出会う。これ、保育室に置けば子どもたちは笑うだろう。本物に触れ、収穫する活動。際限なく働きたくなるのが農場の畑。子どもの遊びの感覚と同じ。

### 自然体験を口で確認（食育）

搾ったばかりの牛乳からカッターチーズを作る。温めた牛乳にレモン汁を加えて濾す。手間はいらぬ、バター作りには根気がいる。ペットボトルの牛乳を振り続けなければならぬから。ボトルの壁面にバターが分離し始めるとうれしくなる。

マヨネーズは先刻鶏舎で集めた生温かい卵を使う。卵がこんなにもサラダオイルを飲み込むものかを実感する。

バターもマヨネーズも自分で作ってから使用するもの。都会育ちの、ピアノの上手な保育者にはこのような発想はなかった。

自分が畑で収穫したジャガイモ、ニンジン、ダイコン、キュウリ、ズッキーニ、セロリ、トマト……を生で、ゆでて、炒めて、出来立てチーズと和えて、食べる。朝には初対面だった人と人が心を開く。もっと知りたい、知恵を、知識を、工夫を得たい。

まだまだあります……。

森に入ればキノコが、草原に出れば一斉に咲き始めた花々が目を留めてほしいと言わんばかりに背伸びをしています。彼らの名前を知りたい。彼らは役に立つの？ 食べられるの？ 毒があるの？

森から農場に入る時は「柵をキッチンと閉めること」。——なぜ？ 夜中に鹿が入ってきて野菜を食べてしまうから。

「キッチンと閉める」「手を洗う」「靴は靴置き場へ」は子どもたちが園で身に付ける大切な作法・習慣。ここでは農場の産物を守る必須の作法。自然との、野生生物との知恵比べ。

絵本の世界ではない、現実的な生活処理能力が欠かせない。

このように、本物の自然体験の中で、保育者は子どものように好奇心のまなざしを光らせ、注意深くなります。そして感動する心も開かれていきます。保育者に新鮮な驚きの心をもたらす具体的な体験が、ここでの自然体験にはあるのです。

子どものまなざしと感動を即座に感じる力を持つ保育者の力量に深い影響を与える体験です。保育者自らの自然体験活動に含まれる重要な意味がここにあると考えます。

\*室田先生から自然体験合宿に関するインフォメーションがあります。本誌P 63の「子ども学ひろば」をご覧ください。

## 視点3

# デンマークの「森の幼稚園」を訪れて

中村 紘子

(大学院生)

二〇一四年夏の二週間、デンマークの「森の幼稚園」を訪れる機会に恵まれました。今回訪れたのは首都コペンハーゲンから車で三十分のガンルースの森を拠点とする私立の認可ステインルース森の幼稚園。森の広さは、約一六〇ヘクタール（東京ドーム34個分）。主にカシの木やトチノキなどの落葉樹から成る森ですが、湖が隣接していたり、昔スウェーデンから流れてきたといわれる大きな岩盤が森の中の一角にあつたりと、多様な環境を備えています。森の幼稚園の中には、直接森の入り口に毎朝集合するところもありますが、

バスを所有するこの園は、市内の三か所のバス停で子どもたちを乗せながら、毎日森へと向かいます。二歳十一か月から六歳までの二十四人の子どもたちと、有資格四名・無資格一名の保育者が交代制で毎日三人、九時から午後二時半まで森の中で一緒に過ごします。

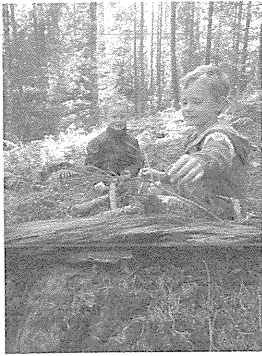
### 小さな森の案内人

森の入り口にバスが到着すると、子どもたちはリュックサックを背負い、朝の軽食をとる森の中の小さな東屋<sup>あずまや</sup>まで歩きます。軽食はそれぞれ持参した果物や野菜、ナッツなど。

中村 紘子（なかむらひろこ）  
お茶の水女子大学大学院前期課程在学。

食べ終わった子どもたちから、落ちている小枝を拾い集めたり、木漏れ日とたわむれたり、倒木の上を渡り歩いたり、思い思いに遊び始めます。

東屋の周辺の少し開けた場所でゆっくり過ごす日もあれば、湖や岩、木登りに絶好な木、滑り台ができる倒木など、みんなで目指す場所を決めて移動しながら過ごすこともありま  
す。行き先や道順は、季節や天候を考慮しながら前日や当日に子どもたちと保育者で決めますが、鳥の声や動物の足跡に導かれ、柔軟に変更することもありました。列に並んだり先頭を決めたりして移動することはありません。



ん。ただし、分かれ道や、「待ち合わせの石」と呼ばれる目印の石の所に来ると

必ず全員を待つことになっています。

「待ち合わせの石」にはじまり、子どもたちは森の中のさまざまな物を紹介してくれました。「トロールのたんこぶ」と呼ばれる木のこぶ、「トロールのおしっこ」と呼ばれる岩の上の大きな水たまり、二股に分かれた幹の間を通ると願いがかなうといわれる「願い事の木」など、子どもたちの間で受け継がれてきた呼び名の数々を教えてくださいました。子どもたちは、自然の中のさまざまな現象を自分たちの言葉でとらえ、想像を膨らませながら語り、そのことを通して森との関係を深めているようでした。また、おのおのにお気に入りの場所を持ち、「これが私の隠れ家だよ」と招待してくれました。それは茂みの中だったり、木の幹の割れ目の間だったり、木の枝を組んで作った空間だったり……。日々過ごしている森を見せてくれる子どもたちはとても誇らしげで、まさに頼もしい森の案内人でした。

## 自分の頭や心を働かせるということ

できるだけ決まり事を作らないというのが、ステインルース森の幼稚園の方針です。森の中で、どこまで行ってよいのかということも、保育者が具体的に定めているわけではありません。「大人が見える場所、大人に呼ばれて聞こえる場所まで」というのが子どもたちの間で暗黙の了解となっているようでした。目に見える境界線がないからこそ、自分だけがどんどん離れていかなないように、保育者や周りで一緒に遊ぶ仲間の存在を感じながら遊ぶことが求められていたように思います。それでは遊びに集中できないのでは、という疑問



も持ちましたが、広い森で自由に遊ぶということは、こうして自らの身を守る責任を伴って遊ぶということなのでしょう。

また、子どもたちが葉や花をちぎったり、木の枝を折ったり、小さな虫をつぶしてしまったり、見ていてどきっとするような場面もありました。けれども、保育者がそれらの行動をむやみに制限することはありませんでした。その分、子どもたち同士で「それはあんまりだ」と注意し合ったり、友達が虫のために時間をかけて小さなお墓を作っている姿を見て、自分がしてしまったことの大きさに気付いたりする姿がありました。

森での過ごし方を保育者があらかじめ決めてしまうのではなく、それぞれの子どもたちが自分の感覚を頼りに、そして仲間とそれをすり合わせながら、頭や心をしっかり働かせて判断をしていくことが大事にされているように感じました。

## 子どもたちの育ちを叫び出してくれる森

森で過ごす間、保育者が子どもたちに積極的にかかわっていく様子はほとんど見られませんでした。移動前に集合する時や帰りの会では、保育者が子どもたちをまとめていることも多いのですが、その他の時間はコーヒールを片手に少し離れた所から子どもたちの様子を見ている姿が印象に残っています。あえて子どもたちと距離を置いているようにも見えました。その理由を保育者の一人に尋ねてみると、こんな言葉を教えてくださいました。

“borne skal kede sig.” 「バーンスキヤルキルサイ」

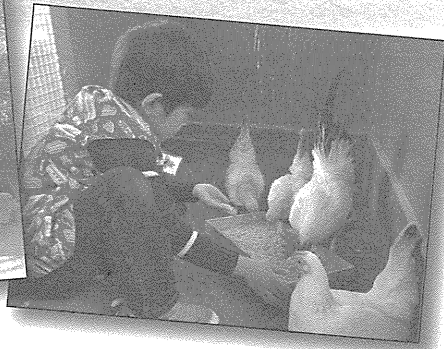
直訳すると、「子どもは退屈して過ごすべき」。ここに込められる意味は、「子どもたちの退屈な時間を保障することの大切さ」ということのようにです。常に大人が何かを与え、提案し続けるのではなく、子ども自身が森の

中で感じ、考える時間を大事にしたいという思いによる言葉です。しかし、決してただ遠巻きに見ているだけではありません。人の力ではどうにも変えられないこともよく起きる自然の中で、子どもたちが何に気付き、受け入れ、克服していくのか、ということを保育者たちは丁寧に見取っているようでした。

「さまざまな変化や多様な命に富んだ森が、子どもたちの育ちを引き出してくれるのだ」と、森に尊敬と感謝の気持ちを抱き、保育の場としての特性を理解しながら自らの子どもたちとのかわり方を考える保育者たち。このような保育者の在り方から多くを学んだ二週間となりました。







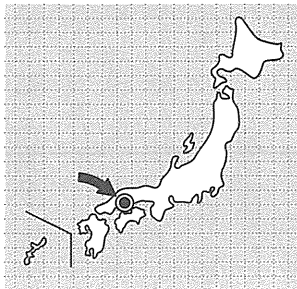
都会の子どもだけでなく、自然が身近にある地方においても、子どもの自然体験は乏しくなっているという。園の統廃合が進み、豊かな自然の中を通園バスで通り抜け、家の近くと園の往復をしている子どもたちの図が思い浮かぶ。

幼児教育における「自然体験」について考える際、二つの側面がある。「自然」それ自体の縮小と汚染・破壊が進むという問題が一方にあり、自然に触れ「体験する」機会が子どもから奪われているという問題が他方にある。前者は社会的な問題だが、後者はまだ、保育における個々の取り組み次第で改善していく方策を考えられるだろう。長期的視野に立てば、自然に触れる楽しさ、面白さを体験したことのある人を育てることこそが、前者の問題を軽減させるための確実な手立てとなっていくに違いない。

特集『「自然体験」って何だ?』の巻頭《View 視野》で大澤氏は、日本の幼児教育における「自然体験」の重要性について論じ、幼児期に「自然を愛護する人間」として形成されることが「人類生息にとって望ましい環境」作りに欠かせないという危機感を提示した。《視点1》の伊東氏は、「大きな自然の前に、じつとその姿を見つめる」子どもたちに寄り添い、そのような日々の園生活を保障しながら子どもの「自律」とは何かを問う。《視点2》の室田氏は、大人である保育者自身が「ホンゴトの」自然体験を持つことの大事さを、特に「食」という営為から考えさせる。《視点3》の中村氏の報告は、今多くの日本人を引き付けている「森の幼稚園」の発祥の地デンマークの保育現場に飛び込んだ、貴重なルポルターージュである。(H)

シリーズ  
子どもが育つ  
場所から

# 「あそんでぼくらは人間になる」



今号のレポーター

宮本雄太

東京大学大学院修士課程在籍。  
ゆうゆうのもり保育園勤務。  
園での実践知を哲学の視点から  
再考し、実践の思索を論理的に  
明確化したいと思っています。

かえで幼稚園（広島県廿日市市）

園庭に隣接する広大かつ高低差のある「かえでの森」は、子どもたちの冒険心をかき立て、挑戦、発見、葛藤などの姿にあふれています。今回、「あそんでぼくらは人間になる」を合言葉に、主体的に考え、かわりながら共に成長し合う保育を実践しているかえで幼稚園を紹介します。

かえで幼稚園は広島県の西南部、日本三景の一つである「宮島」の近くに位置し、非常に自然豊かで雰囲気の落ち着いた高台にあります。眺望も雄大で、日々この景色のもと生活をしている子どもたちのことを思うと、うらやましくもあり、ほほ笑ましくもあり、訪問客の心を温かくしてくれます。

かえで幼稚園の保育は、子どもの自由な発想を尊重し、自由に行動し、遊びを通した成長を大事に考えています。かえで幼稚園の保育は雑誌でよく取り上げられ、名は知られているところですが、一躍有名になったのは、テレビ新広島が制作したドキュメンタリーが放送されてからではないでしょうか。運動会をつくっていく過程で、子どもたちの意欲ややる気を引き出しながら、子どもたち自身で考えることを大事にし、いろいろな作戦を試していく中でクラスが一つにまとまっていく姿、また、コマ回しに挑戦していく過程で、

友達の存在に支えられながら乗り越えていく姿、大縄跳びの記録更新を目指す子どもたちの間に芽生えるライバル心と仲間を思う気持ちの揺れ動く姿など、どれをとっても感動的であり、一人の人間として存在する子どももの素晴らしい姿を映し出しています。まさに、かえで幼稚園が大事にしている「あそんでばかりは人間になる」を映像で物語っていて、そのドラマにどれだけの人が心を揺さぶられたことでしょう。

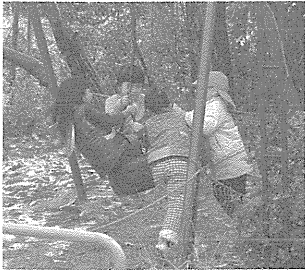
### かえで幼稚園訪問

今回の訪問は、広島で行われた第24回乳幼児教育学会後で、十名以上集まったの訪問になりました。前日まで雨が降り続き、当日の見学が心配されましたが、この日は日差しが暖かく、子どもたちにとってまさに遊び日和、大人にとっても見学日和の一日でした。

園に着くと、少々緊張気味の私たちを横目

に、四輪車に乗った子どもたちが私たちを引かんばかりにストレスを横切っていきます。そして屈託のない笑顔を振りまいて去っていくのです。見学者慣れたその行動に思わず私も笑みがこぼれてしまいました。

園庭では、小さな紙袋を持った子どもたちが木の下で懸命に何かを探していました。それは、ドングリ。何やら食べられるドングリということ、見に行くと、「ほらー、見て！こんなにあるんだよ」「先生にも見せてくる」と走って行ってしまいました。また、ほかに、サッカーをしていたり、ブランコに吊る



▲タイヤ回し

されているタイヤに複数人で乗って、みんなで回して回転を楽しむ姿もありました。

中でも、木の板で作られた崖がけのぼ

りのような遊具「屋根のぼり」では、年少さんが、崖に吊るさられているロープを取ろうと何度も必死に挑戦する姿が見られました。この崖に

は、届きそうで簡単には届かない位置にロープが吊るされていて、握力、脚力などがある程度育っていないとのほれないようになっていきます。途中、年長さんが手本を見せてのぼってくれたのですが、この日はとうとうその年少さんはのぼれませんでした。あの悔しそうな表情は忘れられません。しかし、のぼれる日は近いに違いありません。ちなみに、のぼった年長さんは、遠くを眺めて、気持ち良さそうな表情を見せていました。



▲屋根のぼり

園庭の裏側には、泥団子を作っている子どもたちがいました。子どもたちがいる場所には、泥団子作りには最適の土と砂があります。年中さんが楽しそうにおしゃべりしながら作っている横では、苦戦している年少さん。すると、その年少さんが、急に辺りを行ったり来たり。「どうしたのかな」と様子を見てみると、手にペットボトルのキャップを持ってうれしそうに戻ってきました。そして、土を入れ、砂をかけ始めたのです。そう、キャップ団子を作ろうと思ったのでしょうか。手で作る泥団子は少し難



▲泥団子作り

しかったようで、キャップ団子に切り替えたようです。その姿を見て、年中さんが「こうだよ」と教えている姿がありました。

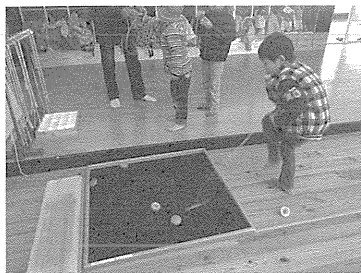
さらに、園庭

をぐるっと回っていくと、年長クラスのテラスでは、野球ボールを持つている女の子が座っていました。そこにはお米の入ったすり鉢があり、野球ボールを中で転がすことで、脱穀をしていたのです。興味深い姿がたくさん見られました。

続いては室内を見学です。室内では、先日園内で創作展「そうさくらんど」が行われたばかりということで、作品があちらこちらに残っていて、それを使って余韻を楽しむ子どもたちの姿がありました。中には相当ポロポロになったものもあって、作った物をとことん楽しむ子どもたちの姿が想像されます。ま



▲脱穀作業



▲コマ回し

さんはずでに回せる子も多くいるようですが、この日は回せずに何回も挑戦する男の子がいました。職員も回し方を教え、周りでは子どもたちが様子を見て、時



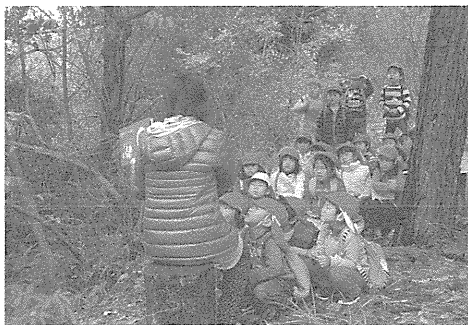
▲創作展の余韻

さに過程を大事にしてきたからこそ作った物への愛着が持てるのだろうと感じた瞬間でした。

ホールでは、コマ回しに挑戦する子どもたちの姿がありました。年長

に声を掛けている姿がありました。さすがに、「回せた！」という決定的瞬間には立ち会うことはできませんでしたが、落ち込むことなく挑戦し続ける姿は感動的でした。

この日は午前保育で、すぐに片付けで集まりの時間になってしまいました。雨上がりでしたので、森で遊ぶ姿が見られず残念に思っていた矢先、年中のあるクラスが森で絵本を読むというので、森へ出かけに行きました。大自然に囲まれながら絵本に真剣に見入る姿、そしてその遠方には広大な山々（厳島？）が見られ、何と幻想的で優雅な時間だろう、と



▲「かえでの森」で絵本

一人感慨深い思いに浸ってしまいました。

お弁当や食後の遊ぶ姿は見られず残念でしたが、短時間でも、かえで幼稚園の魅力ある保育、魅力ある子どもたちの取り組む姿が見られた見学でした。

## 中丸園長へのインタビュー

園長の中丸元良先生に、かえで幼稚園の保育についてお話を伺いました。

——日々の保育で大事にしていることは、どのようなことですか？

「子どもは遊びの中で育つ」ということを意識しています。また、子どもは自分で考え、作り出す力・挑戦しようとする力を持っているので、過度に大人が援助しないようにしています。

例えば、子どもたちが好きな遊具「屋根のぼり」でも、大人が援助することは簡単です。

しかし、援助してしまえば、降りる時や次に挑戦する時に、加減や踏ん張り方がわからず、けがにもつながってしまいます。しかも何より、手伝ってもらってのぼつたら、何の魅力もありません。自分で苦労して考えて、友達に教えてもらって、というその過程こそが大事で、だから何度も挑戦したくなるし、のぼつた時の高揚感、満足感は格別なのです。また、ロープを手にはできなくても、子どもたちは屋根の木の隙間に指を入れ、のぼるなど、いかにしてのぼれるのかという工夫を凝らします。その工夫の過程にも、目の前の課題に挑戦しようとする子どもの意志が見られます。

——行事にも子どもの意志が組み込まれる工夫を凝らしているとのことですが？

先日、「そうさくらんど」という作品展がありました。そこでも、子どもたちの気持ちに沿うよう配慮しています。『作品展』とし

て作るのではなく、日ごろの遊びからクラスで話し合い、テーマを決め、自分たちの立てた目標に向かってさらに話し合いながら作っていきます。つまり、作品展に向かう過程自体がすでに子どもたちにとっての『作品展』なのです。それは、他の行事においても同様です。

——広大な敷地だからこそ、職員の配置や連携について、日ごろから気にされていることはありますか？

確かに難しさはあります。しかし、フリーの職員もたくさんいて、しかもどの職員も一人ひとりの子どものことを知っています。最低限に放っておいても大丈夫な環境ではあるようにしています。子どもは、冒険して学んでいくものです。冒険の過程で、小さなけがは、その子にとって良い経験になるので、あ  
る意味「良いけが」と言えるでしょう。しか

し、大きなけがは避けるようにしています。そのさじ加減を見ていくのも、保育者の専門性と言えるのではないのでしょうか。

また、その保育をするにも、職員の連携をどうとっていくかは大事な問題です。そこには、チームとしての信頼感やお互いの理解、同僚性が重要になってきます。例えば、保育の情報交換以外の「人間としてのつながり」という面も大事にしています。それは、気軽に話せたり、付き合えたりする関係です。また、本園では、保育者の保育歴も5年から33年（平均して15年）と、経験の多寡や男女、既・未婚などいろいろな職員がいます。家庭を持つている職員が多いからこそ、わかり合えること、協力し合えることも多いし、そこから学び合えることも多い。子どももそうですが、大人も同様に、そういった基本的な人としての関係づくりは大事にしています。





## 甥Yとの小さな冒険

寒河江芳枝

(大学教員)

これは、子どもがいない伯母（筆者）が甥Yと三年続けてデイズニーランドへ遊びに行った体験談であり、デイズニーランドは商品化された場所であると批判しながらも、一方で楽しんできたエピソードでもある。

甥Yは、二〇〇三年二月十九日に誕生した。家族にとっては、久しぶりの乳児であり、日々のYとのかかわりにワクワクした。彼は、二〇一五年四月から中学生になった。

二〇〇六年八月、舞浜の駅で降りて一番喜んだのは、筆者だったのかもしれない。家族連れがたくさん歩いている中、筆者は三歳の

Yの手を引き、デイズニーランドのゲートへと歩いていく。筆者は、出かける数日前から、着替えや救急道具、さらにはペットボトルを数本用意し、大きな袋の中に入れた。まるで海外旅行に行くような準備の仕方であった。当日Yが困らないように、かなりの物を用意した。そのため、荷物が入りきらないと、夫にも同じ物を入れた袋を用意する。

夫は、仕事の後に車でデイズニーランドに到着。筆者は、夫から連絡があると、Yと一緒に入り口まで向かう。その時、夫は筆者の姿を見て呆然と立っていた。なぜならば、夫

寒河江芳枝（さかえよしえ）

白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程在籍。昭和女子大学人間社会学部初等教育学科非常勤講師。著書：「プロジェクト型保育の実践研究」（共著、北大路書房）他。

と同じ大きな袋を筆者も持っていたからである。夫は冷静な声で、「こんなに荷物を持ってゐる人はいないよ。泊りでもないのに。一つ（袋を）車に置いてこようか？」と言うものの、筆者は「Ｙに何かあったら大変！」と言ひ、パークの中へ再び向かう。Ｙは、私たちの顔を見ながらキョトンとしていた。パーク内は広いため、ベビーカーを借りたが、Ｙは乗らず、ベビーカーに乗ったのは二つの大きな袋だった。

Ｙは初めてのデイズニerlandという場に驚き、ゴーカートも遠くから見ていただけだった。筆者が「Ｙ、乗りたいの？」と尋ねると、「ううん、見るだけ」と答える。しかし興味はあるようで、他の場所に行こうと話しても、じつとその場でゴーカートを見ていた。パーク内では、キャラクターに出会う。筆者が「Ｙ、ミッキーさん。一緒に写真を撮っ

てもらおうか？」とはしゃぎながらＹに言葉掛けすると、Ｙは「怖い、怖い」と言いながら、キャラクターと反対方向に歩き始めた。

二〇〇七年八月、四歳児になったＹとデイズニerlandへ行く。行きは昨年と同様、二人で電車に乗って行き、午後から夫が仕事の後に車で到着した。この年は、筆者の弟夫婦からＹを預かっているという緊張した気持ちも少し和らぐとともに、昨年の経験も踏まえて二つの袋が一つになった。

夜のパレードが始まり、火花が上がる時になると、Ｙは「トイレに行きたい」と言う。筆者は、トイレの場所をお店の人に聞き、Ｙを抱きながら必死にトイレへ向かつて走る。

筆者は、Ｙが手を洗う時になると、自分のかかどが痛いことに気付いた。恐る恐る靴を脱いで両足のかかどを見ると、靴下は血で染

まり、靴擦れで皮が取れかかっていた。筆者は驚きとともに、両足を引きずりながらYと一緒に夫の所へ戻る。夫も筆者の姿には言葉も出なかつたようである。

夜空で花火がドンドン上がっている中、私はベンチに座り、Yがけがをしたら使おうと思っていた薬を自分の足に塗っていた。その姿を見ていたYは「ねえね（Yは伯母をこのように呼んでいる）、大丈夫？」と言う。本来ならば、筆者が「Y、大丈夫？ 痛くない？」と聞くはずであつたのだが……。

花火が終わると、夫はYを抱き出口に向かつて歩き、筆者は両足をひきずりながらその後を歩いて行く。何とも情けない姿だつた。

この年は、Yがゴーカートには乗りたいようだった。けれども、運転をするかどうかになると、「ねえねが、運転して」と言う。筆者がゴーカートを運転し、Yは周りを見たり、後ろから一人で運転してついで来る夫に笑顔

で手を振ったりしていた。

また、パーク内でキャラクターに会うと、自分の気に入ったキャラクターと写真を撮りたいようだった。けれども、自分からはそのキャラクターに近寄れず、「ねえね、一緒に行くこう」「写真を撮ってくださいと言って」などと筆者に話した。

二〇〇九年一月、五歳児のYとお正月明けにデイズニールランドへ行くことになった。この年は、デイズニールランドで遊んだ後、夜はホテルに三人で泊まった。ホテルのエレベーターのアナウンスは、ミッキーマウスの声である。Yは、「どこにミッキーが隠れているんだろう？」とエレベーターを見上げながら探している。Yは「きつと、ミッキーはあそこにいるんだよ」と天井を指さしながら筆者と夫に話した。

今回は、目が回るほど何度も何度もゴーカ

ートに乗る。運転はYが行った。スピードを出しながら声を出したり、カーブを曲がる所になると大声を上げたりして喜んでいた。

以前は、なかなかパーク内のキャラクターに言葉を掛けられなかったが、この時期になると、興味のあるキャラクターの方へ走って行き、列に並び写真を撮る。しかし、興味のないキャラクターになると、「○○は、気持ち悪い」などと話して次の目的地へと歩いた。

デイズニールランドという限られた場ではあるが、Yと過ごす中で、Yが自分の思いを徐々に相手に伝えられるようになっていく姿や、新たなものに挑戦し、楽しみを味わっていく過程を見ることができた。

筆者も初めは、Yにけがをさせてはいけない、どのようにしたらYが喜んでくれるかな？ と思う気持ちが強かったように思う。だ

からこそ、大きな袋を用意したり、自分の足から血が出ていたのもわからないほど、Yに真剣にかかわっていた。当時の筆者自身の配慮は、必要以上だったことを、Yとかかわり続けて学ぶことができた。それは大きな変化だった。

先日、すっかり大きくなったYと偶然駅で会う。両手に荷物を抱えた筆者を見ると、Yは「ねえね、荷物持ってあげる」と言い、筆者の荷物を持ってくれた。

今改めて考えてみると、子どものない伯母が、三年間にわたって甥Yと一緒にデイズニールランドへ行き、Yを楽しませようと思っていたが、一番楽しんでいたのはYではなく、伯母である筆者自身だったのかもしれない。

ところで、筆者は二〇一三年に人の子の母になった。わが子の育児に、甥Yとの経験が役立っている。



# 母になるとらいつとそら2

郡司明子  
(大学教員)



生後3か月から  
6か月のYをめぐる話をします。この間、私は少しづつ

体力も回復し、Yを連れて積極的に外に出られるようになってきました。そして季節は冬へ。何かとイベントの多い時期。家族が増えて、一つ一つの出来事が、よりいとおしく大切な瞬間に思えるようになりました。

さて、Yは背中をぐいんと反らして寝返りの練習を始めたと思つたら、あつという間にごろんごろんと縦横無尽に転がるようになり、

間もなくずりばいを会得しました。昨日までは違う「今日できている！」ことへの驚きの連続です。

## 104日目…生活リズム

地域にある子育てひろばの講演会「生活リズムを見直そう」に参加。赤ちゃんの睡眠の基礎知識から生活リズムを整える必要性まで、わが家にとつては旬の内容。毎日の生活スケジュール（起床時間、授乳時間、お昼寝の時間など）がスムーズに行われていると、一日の情緒も安定するという。そのためには、

郡司明子（くにしあきこ）

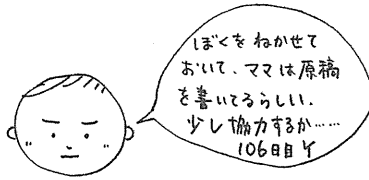
群馬大学准教授。専門・美術科教育。小学校教諭を経て現職。身体性を重視したアート教育を実践研究中。

午前中の遊びを充実させ、夜七時から朝七時の睡眠を習慣づけることが推奨されていた。一方、わが家はこの日まで行き当たりばったり。帰宅の遅い夫にYを風呂に入れてもらい、ようやく寝付くのは夜十一時ごろ。朝昼晩の区別もつかない頻回授乳でこちらもへとへと。

そこで、この日を境に、意を決して私が夕方にはYを風呂に入れ、七時就寝を心がけることに。七時でいったん育児業務終了とは！何と気が楽になったことが。

### 127日目：持てなY

最近Yが持てるようになった物、木製のリング。つい先日までのおぼつかない手の動きを経て、確実に「持てた！」時の表情といっ



たら、世界との交信がかなった瞬間に生きる喜びを得たような満足顔。

最近Yが持てるようになったこと、絵本の時間。四か月健診のブックスタートをきっかけに、地域の図書館に通い、赤ちゃん向けの絵本を借りてくる。ひざの上に抱いて読み聞かせをすると、じっと絵本に見入るY。

### 134日目：リース作り

街は冬の装い。赤と緑のコントラストに、華やかなイルミネーション。近所の花屋さんではリース作りの素材が並んでいた。思わず手に取り、わくわく感が高まる。シナモン、ドライオレング、松ぼっくり、姫リンゴに、かぐわしいクレスト。早速、家で温存し



ていた蔓つると一緒に季節のリースを作り始める。  
Yの寝ている間に少しずつ手を動かす。

### 138日目：映画鑑賞

近所の友人と、赤ちゃん連れで映画を観に行った。『うまれる ずっと、いっしょ』。生まれる命、旅立つ命……。生きることに向き合う家族を描いたドキュメンタリー映画。映画館では「ママさんタイム」なるものがあった。「赤ちゃんの泣き声は映画のBGM！」という何とも温かな企画。館内の至る所で赤ちゃんがありのままにいられる心地いい空間。泣けてしまう内容に、涙がほおを伝って授乳中のYの顔にもほとん。見終わったら体内が浄化されたよう。

### 149日目：おんぶと抱っこ

腹はいに余裕がでてきたY。自力で頭を持ち上げて周囲を悠々と見渡している。ねんね

の状態から体を起こすと世界が反転して見える、その面白さや喜びに全身でひたっている。私の専門とするアート教育は、こうした物事の見方、その意外性や面白さに触れる機会にあふれているのだなあと、改めて赤ちゃんの存在と図工・美術のありようを重ねて考える。

### 152日目：おんぶと抱っこ

友人におんぶひもを借りることになった。画期的！ Yをおんぶしたまま、シンクの物入れの整理が完了。それまで、抱っこやスリングで手が空くことのなかった私。鷺田清一は、おんぶと抱っこでの母子の視線の違いに触れ、おんぶは母子の関係を内に閉ざすことなく、まなざしが外へと開かれていくことに言及する<sup>※</sup>。より社



おんぶは  
うれしいよ。  
あったかくて、すぐ  
ねちゃうんだ。  
152日目 Y



会的な協同の感覚に導くというおんぶ。そういえば、Yをおんぶしている時のほうが、見知らぬ人が声を掛けてくれるような……。

### 175日目：風邪ひき母さん

育児の傍ら、長年の仕事をまとめることにチャレンジしていた。その矢先、ラストスパイト目前で、とうとう私がダウン。背中からゾクゾクと寒気がする。熱を測ると三十八度二分。健康が取りえの私がまさかの発熱。ここから一週間以上せきが止まらない日々。家のことはすべて母にお願いするも、漢方薬の助けを借りながら、嚴重にマスクをして夜中の授乳を続ける。ああ、母親ってしんどい。せめてもの救いは、Yが至って元気だったこと。

ねがえり記念日!  
とみんながでわいびる  
自かひころんて  
ひきたもんね  
170日目 Y



### 183日目：5レンジャー

わが家は十五軒が集まるコーポラティブハウス。その中で、赤ちゃんのいる家が五軒。しかも、そろって男子。名付けて「5レンジャー」。それで、集会室を利用して5レンジャーの会を

たびたび開く。おいしいサンドイッチを取り寄せ、お茶を持ち寄り、子育ての疑問、不安、喜び、あれやこれやを好きなだけ話す。近くに同じ境遇の仲間がいることにずいぶんと支えられている。

— 続く —

110110にだこ  
してもらって図書館の  
コンサートに行きたよ  
おはなしも楽しかったね  
172日目 Y



注 鷺田清一著『自由』のすきま』角川学芸出版

二〇一四年 pp.20-22

## 子どもは豊かな遊びの世界を生きている②

### あこがれに向かう力

河邊貴子

(大学教員)

子どもを動かす「あこがれ」

人の行動を引き起こす要因にはいろいろあるだろうけれど、子どもにおいて最も大きな動因は「あこがれ」という感情だと思う。少し前になるが、ディズニー映画「アナと雪の女王」がブームのころ、日本中の園で女の子たちが挿入歌に酔いしれていたことは記憶に鮮明である。「あこがれ」という語の古い形は「あくがる」で、その語源は「あく〓ある場所・がる〓離れる」。人間の身や心があるべき所から離れていくことを指すのだそうだ。「Let it go」を陶醉して歌っていた女兒たちの心は、あの瞬間、現実の世界から映像の世界に飛んでいたのだろう。差し出す手の先から雪が舞い、踏み出す足元から氷が広がると信じ切っているふうだった。私たち大人には見えないものが、子どもたちには見えている。

「あのようにになりたい」あるいは「あのようにやってみたい」というあこがれは、遊びにおける最大の動機である。子どもたちはあこがれの対象に熱中し、そのものを身の内に取り込もうとする。誰が「憧れ」という漢字を「心」と「童」で構成したかは知らないけれど、本当にその通りだ。

河邊貴子(かわべたかこ)

聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ。

## 熟達者へのあこがれ

ある幼稚園の朝。子どもの登園を迎える先生方の首には、けん玉がぶら下がっている。テラスにはさまざまな種類の、難易度が異なるけん玉が置かれていて、その横のCDデッキから音楽が流れている。登園直後、多くの子どもがそのスペースに集まってきて、けん玉を始めた。

彼らが挑戦しているのは「もしかめ」という技で、大皿と中皿の間を「もしもしカメよ♪」の音楽の最初から最後まで落とさずに往復できたら成功というものである。担任の先生はけん玉上級者で、「もしかめ」よりさらに速いテンポの曲に合わせようと練習中。先生のひざの使い方やしなやかな手の動きは子どもたちのあこがれの的である。園長先生はさらに上級者で、園長がやって来てけん玉を始めると、たくさんの子どもが周囲を取り囲む。横に並んで同じテンポで身体を動かしている子どももいれば、正面からじつと手元を見つめている子どももいる。ほとんどが五歳児だが、四歳児も交じる。四歳児の中には少し離れた場所で挑戦している子どももいるし、保育室の中でひっそりとけん玉との出会いを味わっている子どももいる。私はさまざまな子どもの姿を見て、レイヴとウエンガーが提唱した学習論を思い起こした。

彼らは、熟練者は教える存在ではなく実践共同体において最も十全的に実践に参加する存在で、そのことよって未熟者に対して、ああいう人になることという具体的な到達点を示すこととなる<sup>※</sup>という。レイヴらは、学習というのは個人の中に知識が蓄積されることではなく、社会文化的な実践に参加することそのものであり、次第に中心的な役割を担うことよってさまざまな価値を学ぶことであると考えた。子どもたちは熟達者にあこがれ、自らの技を磨こうとしていて、そ

の間にいろいろなことを学んでいるのだろう。けん玉の横にはお手玉もあり、けん玉の代わりに手のひらと甲の間で往復させる技に挑戦している子どももいる。三歳の男児がまねをするがうまくいかない。すると、五歳女児が三歳児の手のひらにお手玉を乗せ、その上から曲に合わせて自分の手でリズムを刻んでやっていた。

けん玉の行為自体を見れば個人内で完結する遊びかもしれないが、決して「一人遊び」ではない。伝統的玩具の持つ魅力、難易度の異なるけん玉や楽曲が用意されていて、それぞれの力量に合わせた挑戦が可能な環境設定。熟達者が近くにいること。これらが織り成されて活気ある状況が生まれ、その状況の中にあこがれが埋め込まれている。自分よりも未熟な者も近くにいることで、その者にどう対処すればよいかも学んでいる。あこがれの連鎖が、けん玉を集団の遊びとして成り立たせている。

### 「あこがれ」に向かう力を土台にして

けん玉やこまのように技能レベルが一目瞭然の遊びの場合、子どもは向かうべき具体的な到達点を定めやすい。この場合のあこがれは現実的なものといつてよい。「アナ雪」に見られたような虚構の世界に心が飛んでいくのとは、あこがれの質が少し違うように思う。前者はできること(= doing)へのあこがれ、後者はそのものになる(= being)ことへのあこがれと言い換えてもよいかもしれない。この両方のあこがれが、子どもにとつては大切なのだと思う。

後者のあこがれは幼児期ならではの遊びである「ごっこ」を生み出す。あこがれの何かになりきって遊ぶことで、子どもは「自分は何者にもなれる」と信じる種を心に宿すだろう。そして、

何かに熱中して取り組むことによつて達成感を味わい、自己を実現していくだろう。

今、私の手元に『小平子ども劇場20周年記念誌』がある。子ども劇場というのは、文化芸術や遊びの体験を通して子どもと大人が共に育ち合うことを目指している全国組織であるが、この地域でも会員数が減る中で奮闘していて、小平地区も例外ではない。二十年という節目が輝かしい。

記念誌には幼児から大学生までの子ども会員が「大きくなったら何になりたいか」という質問に答えていて、子どものあこがれの変化が透けて見える。「きんぎょ」と答えた二歳児は、金魚に興味があるのか、質問の直前に餌でもあげたのだろうか。「仮面ライダー」「白いロールパンナちゃん」と答えたのは共に三歳児。彼らは瞬間的にそのものになれる特技を持っている。「サッカー選手とバイオリニスト」と答えた年長児には、思わずエールを送りたくなる。この二つを職業として両立できると信じる大人はほとんどいないから。小学生になると、あこがれは職業として現実味を帯びてくる。例えば、「ピアノの先生」(小四)、「イラストレーター」(小五)、「保育士」(小六)。次第にあこがれと現実の可能性とを天秤にかけ始めるのだろう。「探し中」(十八歳)と正直なものもあるし、「ポロロッカ星人」(大学一年)と自分の真意をはぐらかしているものもある。現実とはどんどん厳しくなるようで、「命が狙われることのない平穏な生活をする」(大学三年)という回答には、彼が再びあこがれに出会えるようにと祈るしかない。

金魚や仮面ライダーになれると信じている幼児たちも、すぐに大きくなってこの大学生のように自分探しの迷路に入り込む。その時に彼らを支えるのは幼児期の遊び体験だと私は信じている。「あこがれ」に同化して遊び込むことのため込んだエネルギーが彼らを支えてくれるだろう。

注 レイヴ・J. & ウェンガー・E. 『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』佐伯胖訳 産業図書一九九三年



『海を見たことがなかった少年  
モンドほか子供たちの物語』  
J・M・G・ル・クレジオ 作  
豊崎光一・佐藤領時 訳  
(集英社文庫 1995年)



『カトリーヌとパパ』  
パトリック・モディアノ 作  
ジャン＝ジャック・サンベ 絵  
宇田川悟 訳 (講談社 1992年)

## フランスの 二人のノーベル賞作家

評者

中村俊直  
(大学教員)

二〇〇八年と二〇一四年に二人のフランス人の作家がノーベル文学賞を受賞しました。二〇〇八年にはジャン＝マリ・ギユスターヴ・ル・クレジオ(一九四〇年生まれ)が、そして昨年の二〇一四年にはパトリック・モディアノ(一九四五年生まれ)がその榮譽に浴しました。フランス人のノーベル文学賞受賞者としては、ル・クレジオが十四人目、モディアノが十五人目となります(ただし一九六四年のジャン＝ポール・サルトルは辞退)。

この二人の作家は、それぞれ少年少女を主人公にした短編小説を書いています。その作品の紹介です。

ル・クレジオ著

『海を見たことがなかった少年』

これは八つの短編からなっている作品集です。そのうちの一つがこの本全体のタイトルのにもなっている「海を見たことがなかった少年」

中村俊直(なかむらとしなお)  
お茶の水女子大学教授。専門は現代フランス文学、日仏比較文学。

年」です。

この八つの短編は多かれ少なかれ子どもが主人公です。しかしその子どもは、日常的にどこにでもいそうで実はそうではないという子どもです。いわばこの世界とは別の世界に属しているような子ども、異次元の、または神話的次元の世界に属しているような子どもです。私はこの本を読みながら、宮澤賢治の『風の又三郎』に登場する高田三郎を思い出しました。あまりにも異世界の雰囲気を漂わせているために、周りの子どもたち皆から「風の又三郎」と呼ばれる少年を。

「海を見たことがなかった少年」の主人公のダニエルは、ある日突然、友人たちの前からも両親の前からも姿を消してしまいます。彼は、本当の海、「彼だけのための海」を見るために旅行に出たのです。そのような海を見いだしたダニエルは、ひたすら海と戯れます。

その海との交流の情景がこの短編小説の大部分を占めています。ダニエルは海と一体化することによって無上の幸福感を味わいます。

この本に収められた別の作品（「リュビ―」では、自然との一体感が次のように印象的に描写されています。

「陽の光が顔を灼くように照らしていた。光線は、指、眼、口、髪を通して彼女（リュビ―）と呼ばれる女の子）から出ており、岩場や海の輝きと一緒になっていた。」

このように、この短編集ではどの小説でも自然の描写が質的にも量的にも重要な位置を占めています。その自然は、人間と対立してその強大な力で人間の存在を圧倒するような自然でもなく、その崇高さや美しさで人間の精神を畏怖させるような自然でもありません。ましてや四季折々に人間の心情に「もののはれ」を感じさせるような自然でもありません。

ここで描かれているのは、すべての生命の誕生の源である自然であり、人間の文明が発達する以前の原初的な力を内包している自然です。そのような自然と一体化して、自然が持つている原初の豊饒な力を取り戻すこと。それができるのは子どもだけであって、文明化された社会の中で成長しきった大人にはできないことだと作者は言いたいのでしょうか。

ヨーロッパ文明への批判的な視点は、ル・クレジオの文学活動において一貫している視点です。彼はヨーロッパに対する異文化圏に好んで身を置き、そこから西欧を支配する文明を相対化し、さらには批判することを重視していました。この小説もそのような視点から書かれていると解釈できます。

前衛的な作風が高く評価されたル・クレジオですが、意外なことに、子ども向けの絵本も書いています。『木の国の旅』<sup>註1</sup>というタイト

ルの絵本で、男の子が森の中を旅して、さまざまな樹木と交流するというお話です。やはり自然との一体感がテーマです。

### パトリック・モディアノ著

### 『カトリーヌとパパ』

ル・クレジオが、実験的な、それ故少し難解な作風（特に初期は）であるのに比べ、パトリック・モディアノの小説はわかりやすい作風です（といってもその見せかけのわかりやすさにだまされてはいけないのですが）。

『カトリーヌとパパ』は次のような物語です。カトリーヌは現在ニューヨークでバレエ教室を開いてバレエを教えています。彼女は教え子の子どもたちのバレエの練習を見ながら、自分も三十年前にパリでバレエを習っていたことを、優しいパパと二人で暮らしていたことを思い出します。その思い出がこの物語の



ほぼ全体を占めています。

この作品の登場人物は皆謎めいています。それは作者がすべてを明確に説明するということをしないからです。

カトリリーヌが通っていたバレエ教室の先生は、生粋のフランス人であるにもかかわらず、ロシア人風の偽名を使い、フランス語もことさらロシア語なまりで話します。カトリリーヌのバレエ教室の友達のおデイルは、大豪邸に住んでいるお嬢さんですが、ある日突然、バレエ教室に来なくなりました。その理由は「レッスンを払えなくなつたから」です。それに、そもそもカトリリーヌのパパがどんな仕事をしているのかもよくわかりません。

作者はパパとカトリリーヌの生活を断片的に語るだけで、伝統的な小説のように、小説の舞台となる情景をこと細かく描写したり、登場人物を詳細に説明したりするということは

一切しません。むしろ意識的に言わないでおくことによって読者の好奇心を宙吊りの状態にします。それがこの小説の重要な技法です。

この物語の冒頭で、この小説の雰囲気を読んでいるような象徴的なエピソードが語られます。カトリリーヌは普段は眼鏡をかけていますが、バレエのレッスンの時には眼鏡をはずします。カトリリーヌは眼鏡をはずした時のことをこのように語ります。

「めがねをはずすと、まわりのすべてがぼやけてにじみ、(中略)世界はなめらかになって、ほおにふれる大きな枕のように心地よく、ふわふわしたうぶ毛のようになるのです。(中略)めがねをかけると、すべてものが、いつものかたさどくつきりした形をとりもどします。世界はあるがままに見え、もう夢を見ることもできませんでした。」

ここでは世界をはっきりと説明するのではなく、むしろことさらぼかして描くことが重

要です。小さな女の子からの視線で描くこと、そしてその体験を三十年後に思い出として語る。こと。モディアノはいわば二重にフィルターをかけて、謎と郷愁に満ちた世界を描き出します。

ジャン＝ジャック・サンペの絵もこの本の中で重要な役割を果たしています。それは単なる挿絵というよりは、文章と一体化して、セピア色の懐かしさが漂う世界を作り出しています。このサンペは、児童書「プチ・ニコラ」シリーズの挿絵も担当した画家です。

しかし、この作品はそれだけではありませ

ん。  
パトリック・モディアノの父親はギリシア起源のユダヤ系フランス人です。そして「モディアノ」という名前はイタリア風の名前で

しれません。彼の母親はベルギー人です。父親は第二次世界大戦中のナチス占領下のパリで、危険を冒して、ユダヤ人の身分を隠して潜伏していました。そんな時にパトリックの母親となるべき女性と知り合いました。

このような出自のために、モディアノは自らのアイデンティティーに対する不安定感を常に抱いています。

モディアノはある雑誌のインタビューに對して次のように答えています。

「いかなる伝統にも、またどんな国家的・歴史的過去にも、自分は根ざすことができないという感覚、つまり自分はデラシネ（故郷喪失者、根無し草）だという感覚をもっています。」（松崎之貞著『モディアノ中毒』より）  
『パパとカトリーヌ』にも、そのような自己のアイデンティティーに対する不安感がかすかに漂っています。

カトリーヌのパパはロシアから移住してき

た移民の息子です。ママはニューヨークからやって来たダンサーです。その二人がパリで知り合つて恋におち、カトリューヌが生まれましました。しかしママはフランスでの生活がなじみず数年してアメリカに帰つてしまいます。

その後数年間、カトリューヌはパパと二人だけでパリで生活します。そしてこの物語の最後で、カトリューヌとパパは、ママと暮らすためにアメリカに向かつて旅立ちます。それから三十年たつて自分の過去を確かめようと子ども時代のことを思い出すカトリューヌ。

このように過去の思い出の中に自らのアイデンティティーを探索するというテーマは、モディアノの文学世界においては重要なモチーフです。例えば一九七八年発表の『暗いブティック通り』<sup>き</sup>は、記憶を喪失した主人公が、自らの失われた過去を必死に取り戻そうとする小説です。この小説は同年の「ゴンクール賞」(日本でいえば「芥川賞」に相当するか)

受賞作で、著者の代表作の一つです。そう考えると、ニューヨークの町で三十年前のパリの生活を思い出す行為は、自分のアイデンティティーを確認する作業であるとも言えます。

なお、二〇一四年にはノーベル経済学賞もフランス人のジャン・ティロールが受賞しました。しかし大方のフランス人にとっては、同胞が経済学賞よりも文学賞を受賞したことのほうがよほどうれしいようです。何といってもフランス人は、フランス語が世界で一番美しい言葉だと信じて疑わないのですから。

#### 注

- 1 ル・クレジオ著 アンリ・ギャルロン絵 大岡信訳『木の国の旅』文化出版局 一九八二年
- 2 松崎之貞著『モディアノ中毒』図書刊行会 二〇一四年
- 3 パトリック・モディアノ著 平岡篤頼訳『暗いブティック通り』白水社 二〇〇五年

# 昔むかし の キンダーブック<sup>②</sup>

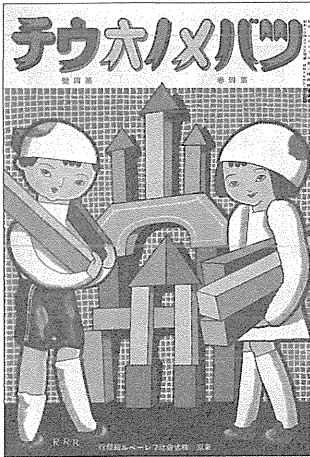
## 『ツバメノオウチ』にみる戦前の遊戯作品

小栗百子

(舞踊教育家)

付録『ツバメノオウチ』

『キンダーブック』創刊の五年後、昭和七（一九三二）年に『ツバメノオウチ』は付録として創刊されました。『キンダーブック』の解説



▲画像1 『ツバメノオウチ』  
創刊号表紙  
武井武雄 画（昭和7年）

だけでなく、童話・昔話・手技・遊戯など幼稚園の先生に対するもの、弁当の作り方・病気の予防など母親向けのものが記されており、両者に対する指導書的な役割を担っていたと考えられます。<sup>注1</sup>

また、創刊号の扉ページに、「キンダーブックは、幼稚園の幼児のための観察絵本でありまして、近來教科書として御採用の幼稚園が多くなつたことは、如何にこの絵本が優良であるかを物語るものでありまして、本社の光栄とする所であります。併し、観察のみでは児童の情操教育の上に物足りない感があり

小栗百子（おぐりももこ）

お茶の水女子大学大学院博士前期課程 舞踊・表現行動学コース修了。（株）ポピンス勤務。

ますので今度『ツバメノオウチ』を創刊してこれをキンダーブックに添付して、完全なものにいたしたいと存じます。」と記されるように、特に保育者や保護者に対して、情操教育に関する記事を提供する目的で創刊されたことがわかります。

### 『ツバメノオウチ』における遊戯作品

『ツバメノオウチ』には創刊以来、当時の優れた振付家らによって子どものために創作された遊戯作品が多数掲載されていました。戦前、昭和七（一九三二）年の創刊号から昭和十二（一九三七）年まで、土川五郎、島田豊、石井漠によって作品が提供されています。遊戯作品の多くは、伴奏曲の楽譜と共に、図または写真と解説文によって振付が示されています。

戦後の復刊後、昭和二五（一九五〇）年より再び遊戯作品が掲載され、昭和三一（一九

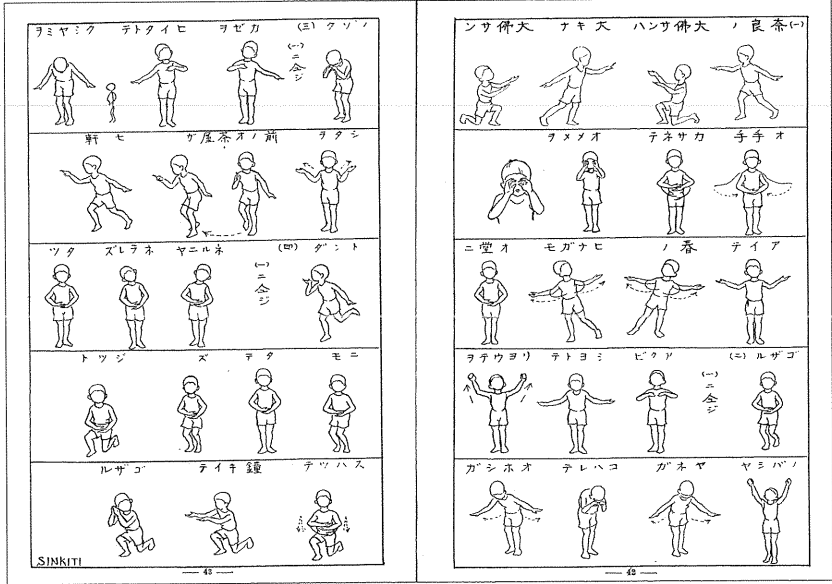
五六）年までの六年間は、ほぼ毎号に、賀来琢磨、戸倉ハル、翠川淳、則武昭彦、石井はるみ、安藤寿美江、増子とし、石井みどりらによって作品が提供されました。

幼児教育に多大な影響を与えた『キンダーブック』の付録『ツバメノオウチ』に掲載される遊戯作品は、保育者や保護者を啓蒙し、当時の舞踊教育を象徴するものであったのではないのでしょうか。本稿では特に、戦前の遊戯作品を舞踊教育の立場から紹介していきます。

### 土川五郎振付「奈良の大佛さん」

はじめに、戦前の『ツバメノオウチ』創刊より十一作品を提供している土川五郎（注）の初期の作品「奈良の大佛さん」（西條八十作詞／中山晋平作曲）を紹介します。

土川の作品では、おおよそ一小節ごとに歌詞を区切り、それに振り付けられている動き



▲画像2 遊戯「奈良の大佛さん」振付図 土川五郎 振付・東山新吉 画  
『ツバメノウチ』第4巻第6號（昭和7年6月）P42-43 【資料提供：大阪府立中央図書館国際児童文学館】

を絵と文章で示しています。手の動きによって歌詞の内容を表現する振付が多く見られます。「オ手手」で両手を重ね、「オメモヲ」で両手を丸くして眼鏡のように両目に当て、「アイテ」ではその両手を左右に開くといったように、歌詞の言葉と対応して振り付けられ、次々に動きが展開していきます(画像2)。このように振付において歌詞が重要な要素であったことがわかります。

また、土川の作品では、一つの動きに対して手足の動かし方、目線や首の角度、指先の動きまで細やかに解説がされています。「すくひあげる様に腹部の前へ持ちきたり掌を上にして両手を重ねる」とあるように、身体部位の位置や動かし方を具体的にわかりやすく示し、振り付けた動きが忠実に再現できるように解説がなされています(画像3)。

奈良の大佛さん 振付

土川五郎

「大佛さん……奈良の南へある大仏さまの御姿を、舞で表現するに、

大佛さまは……御姿を、舞で表現するに、

大佛さまは……御姿を、舞で表現するに、

大佛さまは……御姿を、舞で表現するに、

大佛さまは……御姿を、舞で表現するに、

大佛さまは……御姿を、舞で表現するに、

石井漢振付「水泳日本」

石井漢

「水泳日本……水泳の躍動を、舞で表現するに、

水泳日本……水泳の躍動を、舞で表現するに、

水泳日本……水泳の躍動を、舞で表現するに、

水泳日本……水泳の躍動を、舞で表現するに、

水泳日本……水泳の躍動を、舞で表現するに、

水泳日本……水泳の躍動を、舞で表現するに、

▲画像3 遊戯「奈良の大佛さん」図解説明 土川五郎 振付 『ツバメノウチ』第4巻第6號 (昭和7年6月) P46-47 【資料提供:大阪府立中央図書館国際児童文学館】

石井漢振付「水泳日本」

現代舞踊家である石井漢は、二十五作品を

提供しています。「水泳日本」という作品(和田古江作詞/林みつよし作曲)は、二小節

または四小節ごとに区切られた歌詞と動き

が、写真付きで説明されています。

石井の作品には「スキップ」「ツイステッ

プ」「円形の経路を描きながらのジャンプ」な

ど、子どもにとって高度な洋舞の動きが多く

取り入れられています。また、『〇ド』にて

両足を揃へたまま、体を前に稍倒し、顔は前

方を見て両手を第一図の如く後に伸ばす。」と

あるように、歌詞の一字と動きのタイミン

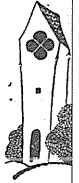
グを合わせるよう、動きの解説が記されてお

り、舞踊に熟練していない保育者や子どもに

とって難易度の高い遊戯作品であったことが

想像されます。また解説文の最後には、「この

踊りは、水泳選手が水を切つて進むやうな力



# 童踊 水泳 日本

(森田古江氏作曲)

振付 石井 漢



前奏(四小節)  
元氣よく手を振つて四歩(二小節)進み、次の二小節はスキップで三歩進み、四歩目に正面に向つて止る。



## ○ドント イツパツ

「ド」にて兩足を揃へたま、體を前に傾倒し、顔は前方を見て兩手を第一圖の如く後に伸ばす。「ント」にて爪立となつて手を後から前上方に揃へ第二圖となる。



## トピロム センシユ

「ト」にて膝を少し屈けて、前上方にある兩手を額の下に膝を張つて第三圖の如く揃へる。



## ○サット アガッタ

始めの停止符で第五圖の如く、膝を少し屈けて兩手を合はせ右側につける。「サット」にて右足を右に踏出すと同時に、手を第六圖の如く一ぱいに伸ばし、又は第五圖の如き形を返る。「ガ」にて第六圖の形となり、「ツク」にて右足踏



6

5

4

3

2

1

— 14 —



## シヤキノ ナカラ

「シヤキノ」にて兩手を揃へ左足より二歩にて一廻りし、「ナカ」にて左側に向き足を揃へて第七圖の如き形となり、「ヲ」にて、足を上げて體をやや前方に倒し、第八圖の如く兩手を前上方に伸ばす。



## ビツチ アゲテク ジングウ プール

第九圖の如く、左手を前方に伸ばしたま、右手は膝を屈けて膝の處に掌を下に向けて置き、左足足にて跳び、「アゲテク、ジングウ」にて反対の足にて交互に跳び乍ら左廻りし、「プール」にて正面を向き、手を前方に揃へ、左足を後に上げて第十圖となる。



9



10



11



12

## スキエイ ニツボン

「スキエイ」にて、手を揃つて振りながら元氣よく左足よりスキップ二歩にて後退し、「ニツボン」にて足を揃へると同時に膝を少し屈けて後から大きく跳し、跳んで足を揃えて、手は上方に揃けて第十二圖の形となる。

【注意】この踊りは、水泳選手が水を切つて進むやうな力強さで、元氣よく踊つて下さい。昔の運動は極めて自由で、固くならぬ様にして下さい。學級の運動でやる様に振付けましたが、固くても踊れます。

— 15 —

▲画像4 童踊「水泳日本」解説文 石井漢 振付 『ツバメノウウチ』第6巻第11號 (昭和9年11月)「セカイイチ」P14、P15



強さで、元氣よく踊つて下さい。首の運動は極めて自由に、固くならぬ様にして下さい。学芸会の舞台でやる様に振付けましたが、円陣でも踊れます。」と一つ一つの動きに対する説明のほかには作品全体に対する「注意」を示しており、どのようなイメージを持つて子どもたちに踊ってほしいのかという振付家の思いが語られています(画像4)。

また当時、水泳の前畑秀子選手がオリンピックでメダルを獲得し、話題となっていました。「セカイイチ」がテーマの『ツバメノウチ』においても、日本を沸かせていた水泳が遊戯の題材として取り上げられたことが想像できます。

### 戦前の『ツバメノウチ』における舞踊教育

今回紹介した二つの作品に共通して、歌詞が振付において重要な要素であったことが明らかとなりました。解説文では、細やかに動

きが説明されており、子どもたちのために振り付けられた音楽・詞・動きが一体となった遊戯作品を忠実に踊ることが当時の情操教育の一つとしてとらえられていたことが想像できます。またこれらの遊戯作品は、歌詞からわき出るイメージを動きとして創出したものもあり、子どもが歌詞の世界観や言葉のイメージを合わせて楽しめるものだったのでないでしょうか。

#### 注

- 1 『京都女子大学図書館資料特別展観 戦前のキンダーブック』京都女子大学・京都女子大学短期大学部図書館 二〇〇七年 pp.9-10
- 2 土川五郎(一八七〇-一九四七) 元来小学校教師であったが、研究を重ね、幼児の遊戯の指導にあたった。「律動遊戯」や「表情遊戯」を提唱。
- 3 石井漠(一八八六-一九六二) 現代舞踊家。幼児への舞踊指導に関しては、自身の研究所においての指導にあたり、保育者や学校教員を対象にした講習会で講師を務めていた。

\*引用文は一部、新字体に変えてあります。

## 保育のクロスロード 保育は素敵な物語 (1)

### 十年後の手紙

湯澤美紀  
(大学教員)

私は、保育を専門とする大学教員です。

私の周りには、真つすぐなまなざしで子どもと向き合うことができる学生がいます。自らの保育のあり方を模索されている保育者がいます。悩み事を伝えてくれる保護者がいます。研究・実践の中にいる私が信頼を寄せられる仲間たち。私がいる場所は、さながら、子どもを真ん中にしながら、さまざまな人たちが行き交う保育のクロスロードです。

日々の交流の中で、私は数多くの心動かされるエピソードと出会っています。そのエピソードの幾つかを、一つの物語としてまとめ

て、皆さんにお届けしたいと思います。

「保育は素敵な物語」。そう共感してくれる皆さんにこれから出会っていききたいのです。

一回目のお話は、学生が、言葉を話さない五歳の女の子きょうこちゃん(仮名)と出会ったところから始まります。一年後、きょうこちゃんは卒園の時を迎えます。きょうこちゃんの成長がテーマとなったカンファレンスの中で、学生と園長先生が思いを伝えます。そこで、ある新たなエピソードが語られます。

## 言葉を話さない、ある女の子の出会い

私が大学で行っている授業の一つに子ども観察研究があります。学生は、実際に幼稚園に通わせていただき、子どもたちを観察し、エピソードをまとめ、考察を深めていきます。その授業を受けた多くの学生は、卒業研究でも引き続き、自らのテーマをもとに観察研究を行います。私のゼミ生となった学生もそんな一人でした。

「先生、卒論の件で相談があるんですけど」  
彼女は、ゆっくり語り始めました。ボランティアで幼稚園に通う中で、気になる女の子に出会ったそうです。

「きょうこちゃん(仮名)、まったく話さないのです。私の前で。でも、お友達の前よりちゃん(仮名)の前では、陰に隠れて、ヒソヒソと話しているのです。でも、私が近づくと黙ってしまいます。最初は、嫌われているのか

なと思って落ち込んでいたんですが、実は、担任の先生も、彼女の声を聞いたことはないのだそうです。みんなの前で、ゆりちゃんと一緒にいる時、きょうこちゃんは声を出しません。そんな時でも、きょうこちゃんとゆりちゃんは互いにわかり合っているようです。それって、すごいなあって思ってます」

私は、「場面緘黙かな」と思いましたが、その言葉は口にしませんでした。学生が、障がい名ではなく、きょうこちゃんのありのままの姿を語っていたこと、そのことが、今の彼女にとっても、そして、近い将来保育者になるであろう彼女にとっても、子どもを理解する上で大切な視点だと思えたのです。

「きょうこちゃん、多分、ちゃんと育っているよ。きょうこちゃんは、きょうこちゃんの成長の姿をきくと見せてくれるから、あなたは、そこから学ばせてもらおう。しっかり、心で観察しておいで」

学生は、ゆつくりとほほ笑み、「はい」と答えました。

### きょうこちゃんのおち

五月。学生はゼミで最近のきょうこちゃんの様子を報告しました。

「きょうこちゃん、普通にゆりちゃんのことを好きだって、(私は)思っていたんです。でも、クラスでカエルの絵を描いていた時、『あつ、ちよつと違う』って思ったんです」

学生は、二枚の写真を示しながら続けました。

「その時、二人は並んで座って絵を描いていました。二人の絵は全くそっくり。きょうこちゃんが、ゆりちゃんの絵をまねているようでした。『あつ』と、小さな声が聞こえた次の瞬間、ゆりちゃんの顔に戸惑いの表情が浮かびました。さつと手を動かした弾みで、カエルの下に、左から右へと横線が付いてしまっ

たようでした。すると、きょうこちゃんは、次の瞬間、自分のカエルの下の、ゆりちゃんが描いた線と全く同じ所に、すーつと線を引き、ゆりちゃんの顔を下からのぞき込んで、につこりほほ笑みました」

学生は、きょうこちゃんが、ゆりちゃんとそっくり同じものを描くことで、深い安心感を抱くことができていること、つまり、ゆりちゃんはきょうこちゃんの安全基地になっていると報告しました。きょうこちゃんの心の動きをとらえた瞬間を、学生は自分の言葉で語りました。きつとそうなのでしょう。学生の言葉は、私にもすつと入ってきました。

それから、きょうこちゃんとゆりちゃんのかかわりは緩やかに変化していきました。ゆりちゃんの提案にいつも従っていたきょうこちゃんでしたが、ゆりちゃんが「ここに座る？」と提案した時に、「ううん」と首を振ったのでした。そして冬に入るころには、こんな

変化もありました。一輪車に乗っていた二人は、そのまま鬼ごっこを始めました。ゆりちゃんにまさに捕まりかけたその時、きょうこちゃんは「きゃつきゃつきゃつ」と大きな声を出しながら、一気にゆりちゃんに顔を近づけました。感情を大きく動かし、体の動きにもそれが表れるようになってきたのも、きょうこちゃんの成長です。そして、きょうこちゃんの声を学生がはつきりと聞いたのは、それが初めてでした。

### カンファレンスで語られたそれぞれの思い

卒業論文の提出は一月ですから、おおよそ観察研究は年末で終わりました。

私の学科では、新しい取り組みとして、学生たちが現場で得た子どもを中心としたエピソードを、実際に現場の先生に聞いていただき、語り合うといったカンファレンスを実施しています。三月に入り、私は、学生から見

たきょうこちゃんの成長を先生方にお伝えするいい時期ととらえ、きょうこちゃんの園でのカンファレンスを計画し、学生に声を掛けました。カンファレンスには、園の先生方、学生数名に加え、私、本学教員の梶谷恵子先生、そして、Y先生が参加しました。Y先生は公立の園長先生をご経験の後、私の大学で学生支援のスタッフとして働いてくださっている、物腰の柔らかな、ほほ笑みの温かい先生です。ただ、いつもそうなのですが、ご自身からなかなか語り始められることは少ない、やや控え目な一面があります。

学生は、彼女の目で見たきょうこちゃんの成長の姿を伝えました。そして、ボランティアで幼稚園に引き続き通い続ける中で、きょうこちゃんはゆりちゃんとのヒソヒソ話に夢中で、学生が近くにいても、そのまま話し続けることがあったことをうれしそうに語りました。学生は、きょうこちゃんが「ついうっ

かり話しちゃっていた」といった出来事がこれから増えていけばいいな、そんな願いを語りました。

園長先生は、最後まで話を聞いてくださり、きょうこちゃんの年少のころの姿を伝えてくださいました。きょうこちゃんの緊張は今よりもっと強く、保育室さえ入れなかったこと。

そして、少しずつ、園長先生が補助としてクラスに入る中で、保育室には入れるようになったこと。しかし、みんなで輪になって座るにはさらに時間を要したことを話されました。

「保育室の真ん中に椅子を並べ、大きな輪を作ってみんなが座る時、私、きょうこちゃんと、ひもでつながっていたんです」

園長先生の言葉に、「どういうことですか？」と、私は尋ねました。

「長いひもをきょうこちゃんに持たせ、私はその端っこを握って、少しずつ、きょうこち

ゃんと私との距離を伸ばしていったんです」私の心に、保育室の椅子に緊張しながら座るきょうこちゃんの姿と、その後ろに座り、きょうこちゃんの背中に応援のまなざしを向けていた園長先生の姿が鮮やかに浮かびました。園長先生はきょうこちゃんのことをずっと見てこられていたのです。

そして、園長先生が今のきょうこちゃんを語り始めました。

「ちょうど、卒園式の練習が始まっています。卒園式では、私が一人一人子どもの名前を呼び、子どもは『はい』と答え、卒園証書を受け取ります」

一息ついて、続けます。

「きょうこちゃんに、返事を頑張ってほしいな、と思って、親御さんにも相談して、この前、きょうこちゃんにそのお話をしたんです。『名前を呼んだら、はいつて言えるかな?』

困った表情を浮かべていました。でも、彼女はうなずきました。そして、昨日、二回目の練習が終わって」

「どうだったんですか？」私は思わず、尋ねました。

「一回目、私が名前を呼んだ時、なかなか『はい』って言えなかったので、『言ってごらん』って小さく伝えたら、『うわー』と泣いてしまつて、しばらく泣きやむことができなかったんです。その失敗体験で終わらせたくないと思つた二回目。ただ、待ちました。時間はかかりましたが、口が小さく動きました。『はい』。声にならない口の動きを見ることができました」

私は、きゅつと心臓が縮んだ思いがしました。そして、「きょうこちゃんは、みんなの前で言葉を出したいのかな」、その言葉はのみ込みました。長きにわたつてきょうこちゃんを

見てきた園長先生です。ここは、きょうこちゃんの背中を押すタイミングなのかもしれませんが。

### 十年後の手紙

しばらくの沈黙の後、Y先生がぼつりぼつりと語り始めました。

「私ね、一人の教え子のことを思い出しました」

みんなは、それぞれの思いを胸に、Y先生にまなざしを向けます。

「私が昔、受け持つた子どもは、もつと話さなかつたんです。園で誰かと話すことはなかつたの。しかも、私が視線を向けただけで、緊張がこちらにも伝わってくるほどでした。気になつて、夕方、その子の家の近所まで行き、外から家の様子をそつとうかがつてみました。すると、その子の家から笑い声が聞こえてきてね。声のする庭を見ると、妹さんと、

まさに園ではやっているおままだとをしていたんです。『あつ、この子はちゃんとお友達の様子を見ているんだわ』。安心した瞬間でした。それから、私は彼女に気付かれないよう、園での彼女の様子を見ていました。すると、他のお友達が遊んでいる時、その子は、よく見ているんですよ。『ちゃんと、学んでる』。そう信じ、私はその子を見守っていきました。もちろん、卒園式でも一言も声を出さないうまま卒園していきました」

Y先生のお話は、ゆつくり続いていきます。「それがね、十年後のこと、私は二つほど園を変わっていましたが、そこに、一つの封筒が届けられたのです。十七歳になったその子からの手紙でした」

十七歳とはいえ、先生が異動した先の園を探し、そこに手紙を書いて届けるといった行為にどれほど大きな決意が潜んでいるか。その十年後の手紙は、Y先生の記憶の引き出し

から取り出され、先生の温かく、そしてゆつくりとした声でみんなの耳に届けられました。

「私は十七歳になりました。まだ、人との付き合い合いは、得意とは言えません。でも、人前で、少しですがお話しできるようにになりました。友達の数も多くはありませんが、心から信頼できる親友もできました。私、Y先生にお礼が言いたいんです。先生は、私が幼稚園の時、一度も、私に向かって『話しなさい』と言われたことはありませんでした。そのかわりに温かく見守ってくださいました。そのことに、『ありがとう』という気持ちも、ずっと伝えたかったです」

静かな時間が、流れました。十年後の手紙が伝えてくれることは何か。それぞれが、きょうこちゃんの今の姿を思い浮かべながら、一つの宿題として持ち帰りました。





◇今号「特集」の筆者から◇

P15-18「保育者にとっての『自然体験』の意味」の筆者、室田洋子氏からのインフォメーションです。

「保育者のための自然体験合宿」は、長野県茅野市にある中央農業大学校で平成26年夏より農林水産省の補助金を得て開始された合宿研修です。

平成26、27年度は補助金を利用するため、参加者は食費のみ負担。原村のペンション2泊の費用、交通費（JR高尾駅から）も国の助成によっています。各回16～20名受付。

平成27年度は、7月24～26日、8月7～9日、8月21～23日、9月4～6日の4回、先着順です。

詳細は中央農業大学校ホームページをご参照ください。

『7歳までのお守りBOOK—西野流「ゆる親」のすずめ(上)「正しい母さん・父さん」を頑張らない。』  
西野博之著 ジャパンマシニスト社 2015年

友人がとてもステキな本を書いてくれた。生まれてきた子どもは、彼の言うところの「お宝ちゃん」。いのちを祝福されたその時のまま、ずっと「お宝ちゃん」として在ってほしい。書き手の応援の声を読み手に聞こえてくるような本だ。それは良い本、読みたい本の条件の一つであると思う。ゆるキャラが、そのゆるさ故に時代にかなうものであるなら、親が、サブタイトルにある「ゆる親」であることこそ、時代にかなう在り方なのだろう。母さん父さんだけでなく保育者にも読んでほしい。(KT)

お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム  
「変革期の乳幼児教育・保育を考える」  
平成27年度 後学期（10月開講）受講生募集

乳幼児教育・保育や子どもにかかわるすべての方々を対象に、豊かな学びを実現するためのプログラムを夜間（18:20～19:50）と集中講義で開講しています。今年度後学期の開講科目は次の通りです。  
「子どもと家族Ⅱ」（月・加藤邦子）  
「乳幼児教育・保育政策論Ⅳ」（水・逆井直紀）  
「現代保育課題研究X」（木・浜口順子ほか）  
「比較保育実践研究V」（集中講義：11/15、12/23 金澤妙子）  
「子ども家庭支援相談Ⅳ」（集中講義：平成28年1/30-31 安治陽子）

【出願期間】平成27年7月21日（火）～8月3日（月）

【URL】<http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji>

【Eメール】[nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp](mailto:nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp)

【TEL】03-5978-5949（担当 安治・猪股）

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学ECCELL（乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築）で企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などを記録した冊子の5冊目です。

Vol.5 第5回お茶大保育フォーラム(H26.6.29開催)「日本の保育現場における“遊び”の意味」

【講演者：榊原洋一（お茶の水女子大学大学院教授）、河邊貴子（聖心女子大学文学部教授）】

実費（500円＋送料）にてお分けします。ご希望の方は、ECCELL事務局 [nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp](mailto:nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp) までお問い合わせください。

## 編集後記

取り立てて、いわゆる「自然豊かな」環境で育ったわけではない。それでも子ども時代の自分にとっては、わが物顔で過ごさせてもらえる外環境があり、その恩恵は計り知れない。大きな顔したって人間なんてちっちゃいんだ。日々危うく命を落としそうになって外で遊ぶ中、地球や宇宙の規模での己の小ささは、子ども心にちゃんとわかっていたように思う。

さて、「自然体験」と聞いてそんな子ども心思い出すと同時に、『子どもたちの時間』の著作もある内山節の『自然と人間の哲学』を思い出した。「自然体験」という語に、どこか人間本位の（あるいは人間優位の）、自然を一方向的に利用するような意図を感じたからかもしれない。子ども（人間）の自然体験を言うなら、自然の人間体験も同時に考えなきゃ、と。

個人的なことになるが、2011年秋以降、東北に顔見知りが増え、具体的な心配やうれしさが増えた。

中でも福島市にはその後何度となく訪れることになり、あの子どうしているかな、あの原っぱはまだ入れないままだろうか、溝で面白いように捕まえてザリガニを今年はかつてのように捕まえて歓声を上げているだろうな、というふうに、人や自然やそのかわりを思い浮かべることが多くなった。人や自然は、それら自体においても両者のかかわりにおいても、その諒解の仕方はおよそ観念的ではあり得ないのではないと思う。少なくとも、見知った誰かの笑顔や泣き顔を思い浮かべたり、花や草の香やそよぎや手触りを思い出したり、草はらを転げ回る子どもの姿と声がりフレインしたりする、そんな具体的な心配無くして何かを憂いたり批評したりすることはしたくないし、できないなと思う。私の誤解や理解不足も大いにあるかもしれないが、観念的な感傷は多分、誰のことも幸せにしないでだろう。(KT)

## 次号予告 幼児の教育 秋号 2015年9月刊行予定

新企画、新連載が好評! 充実した内容でお届けします。

特集 保育現場で気になるコトバ考 7  
—「夢中」って何だ?— 星三和子氏ほか

シリーズ 子どもが育つ場所から  
宮城県気仙沼市の幼稚園に行ってきました

コーナー 古典の散歩道 第7回 窪寺俊之氏

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

## 幼児の教育 夏号 第114巻 第3号

平成27年7月1日発行  
編集発行人/浜口順子  
編集担当/田中恭子  
発行所/日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館  
電話:03-5395-6604(編集)  
振替/00190-2-19640  
印刷所/図書印刷株式会社  
定価/本体834円+税  
©日本幼稚園協会 2015 Printed in Japan

編集委員/伊集院理子  
菊地知子  
高橋陽子  
灰谷知子  
編集協力/フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

※夏号より総ページ数が72ページから64ページに変更になりました。

論文執筆・発表など、保育研究に必要なルールが1冊に！  
保育に携わるすべての保育者・研究者必携！

# 改訂 保育学研究倫理ガイドブック

— 子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために —  
— 一般社団法人 日本保育学会 倫理綱領ガイドブック編集委員会 / 編

保育学研究の心得を具体的な事例や用語解説などを用いて、わかりやすく、ていねいに解説します。

保育所や幼稚園など、保育現場の実践者や園にさまざまなかたちでかわり、研究をされている方々にお薦めします。

21×15 cm 96 ページ 定価 1,000 円+税

## ● 内容 ●

### 条文を解説&キーワードで読み解きます

#### 第1部 保育学研究における倫理

1. 保育学研究における倫理とは何か
2. 「日本保育学会倫理綱領」条文解説

### 気になるポイントを1項目450文字程度でコンパクトに解説

#### 第2部 研究成果の発表と倫理

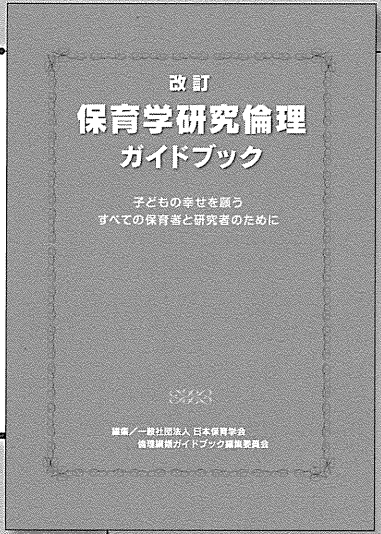
1. 研究成果の公的な場・学会での発表と倫理
2. 研究データ・資料の取り扱い上の問題
3. 引用上の問題
4. オナーシップに関する問題
5. 論文執筆上の問題
6. 学会発表時の問題
7. その他の研究倫理上の問題

### ケースごとに、2つの具体例を紹介

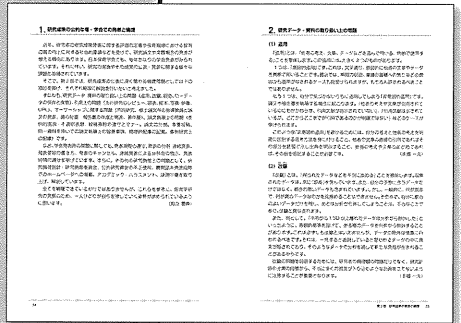
#### 第3部 保育学研究の実施と倫理の事例

1. 保育実践研究の実施における倫理の枠組み
2. 倫理の事例

#### 第4部 倫理の教育



10937



## 内閣府・文部科学省・厚生労働省の公式解説書

MEXT1-1405

幼保連携型認定こども園  
教育・保育要領解説

平成27年2月



34530

幼保連携型認定こども園  
教育・保育要領解説

(平成27年2月)

内閣府・文部科学省・厚生労働省／著

21×15cm 346ページ 定価 本体249円+税

平成26年に告示された『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の内閣府・文部科学省・厚生労働省による公式解説書。オール2色刷。

## おすすめのPOINT

- ①表紙は、人気イラストレーター・かいちとおる先生の絵！
- ②オール2色刷で見やすい！
- ③インデックス付きでわかりやすい！

幼保連携型認定こども園  
教育・保育要領

&lt;平成26年告示&gt;

平成26年11月26日  
所 示  
文部科学省告示第119号  
厚生労働省

34510

幼保連携型認定こども園  
教育・保育要領

(平成26年告示)

平成26年告示の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の全文を掲載。

フレーベル館／編  
定価 本体150円+税  
21×15cm 32ページ

34520

## おすすめの関連書籍

はじめての  
幼保連携型認定こども園  
教育・保育要領ガイドブック

子ども・子育て会議会長 無藤隆先生による、新法理解のためのガイドブック。

無藤 隆／著  
定価 本体1,000円+税  
26×19cm 128ページ